

福山市あたりで往住言はれてゐる。舍利

〔浮瑠璃〕加第二に「既にじあひになりしか

ば、先拂ひの燈籠を立て張務の供養三十圓

を昇か出で来る。新井君美筆、故釋岩

崎文庫藏に「時頃」に「じあひ」と例訓し

てゐる。

しい 四夷八蠻を切摩け(蝦山姥)

〔四夷〕東夷、南蠻、西戎、北狄。禮記・王制篇

に「東方曰夷、被髮文身、有不火食者

矣、南方曰蠻、雕題交趾、有不火食者

矣、西方曰狄、被髮衣皮、有不火食者

矣、北方曰狄、衣羽毛穴居、有不火食

者矣。

しいし 奥に鼓の稽古がある、高い

聲さつしやるな、しいしいしいしな

張物に、かいまみ覗く鼓の手

に(堀川波鼓)

止に(し)をいひかけたのである。「止」は

聲を制するときにいふ詞であつて、佛典にそ

の用例が多い。「稽」は布を洗張などするとき

其兩端にさしわたす竹串である。

祝儀の石 二階の酒のしゆんだ頃祝

儀の石を打込んで(萬年草)

「しうち」を見よ。

じうくん 獸君の一靈山野にはびこ

り、草木を踏折り(反魂香)

〔獸君〕鹿をいふ。拾物語に「虎山鹿之君也、

狀如猫而大如牛、黃髮黑章云云」。

*しうちやく 甲斐甲斐しくも御か

くまへ我身に取つて祝着と、禮儀

細かに相述へ(蟬丸)

〔祝着〕しうちび祝ふこと。満輪。合類大節用

集に「祝著」。

しうばく 「しうばく」を見よ。

じうまんごぐわん云云

*しおき これを思へば世の中に

仕置の絶えぬも道理(冥途飛脚)

〔仕置〕處刑。倭訓栞に「しおき」俗語也。爲

處の義成べし、しはなしの略、おきは處置を

いふ也」と見えてゐる。轉じて處刑をいふ。

*しか 女房先立てながらへあらば

それや犬猫も同じ事、同じ中に

も鹿となり鴛鴦と生れて女夫

池(枕邊)

〔鹿〕獸類の中でも鹿は女夫最も睦じきものと

され、古歌にも「妻戀ふる鹿ぞ鳴くる」な

ど詠まれ、松の葉の唄にも「笛にこする鹿は妻

故に死する。我らもさまにやれ命すてうす

の」など見えてゐる。

*しが ええ無法な主人持つた故思

はぬ面目失うたと、主のしがから

さきに立つ(川中島) あとのしら波

さなみや、浮世のしがを乗せて

行く(探勝)

〔探勝〕難解。人の難解をいうて疵つけるこ

と。眞原好古論、諺に「春秋後公儀云、申侯

有、鹿原於楚、文王曰、予取三汝疵難也。人

に難をいひて疵つて事を京童の詞に疵難と

云也。この文に「しがからさき」には、「疵

難から先きに」に「志賀唐崎」をいひかけたの

である。「浮世のしが」は浮世の疵難に「さ

さなみや」の難語「志賀」をいひかけたのである。

美景時繪の松寶永五年刊)巻五に「我は

便りのなきをうらみ、御身のしがを聞かん爲

芝居見がてらけふの首尾」とある「しが」も

難解の意である。

*しかけ 火繩を筒にさしつくと

齊しく、飛んだる亂火の仕掛(國性

爺) 高い物を買うたと叱られうか

と思つて、錢はしかけで遣りまし

た(堀川波鼓) 額で睨みつ袖引き

つ、手の内つまむも一昔、古い仕

掛が田舎なり(青庚甲)

〔仕掛〕かくり。たくり、鑄はしかけでや

るとは、元祿銀の目方を惡質の質字銀で

拂ふの意。此種の模倣を諷刺化する掛を仕掛

といふ。「古い仕掛」とは、舊人の掌を掴つ

思はせ振に歡心を買ふ仕方は今でははやら

ぬ、昔はやつた古いたくらみだの意。

じがけ 塔前に座を構へ、一心に自

我偈を讀みておぼしめます(大覺)

〔自我偈〕法華經・觀音品に「爾時世尊欲重宣

此義、而說偈言」と云ひ、「自我偈」佛來、所

經語劫歌、無量百千萬、億載阿僧祇、云云」と

ありて、總て二十五行偈ある、其最初の二字

を取つて自我偈といふ。

しかた ああ好い辯舌、楠湊川合戦

面白いうち、仕形で講釋やられ

た所(天經師) こがいな事はあるま

いと仕方まじりの高話(博多)

〔仕形〕身振手振。桐淵貞山編・江戸名所享

保十八年刊)人之部に、「仕形師範から袖へ谷

も出來。山」。

しかのまきふて 硯引寄せ墨をす

り、鹿のまき筆つまこひ鹿(提燈)

〔鹿の提燈〕鹿の尾で筆を作り、紙または色紙

などで軸を巻き附けた筆をいひ、奈良の名

物。和漢三才圖會・卷十五、筆の條に今多所

用着鹿尾也。

しからす お馬の湯洗ひ伏せ起し、

武家の奉公しからせば極味憎汁の

花散りて(薩摩歌)

〔爲謝〕能く償へて未だならぬをいふ。「がら」

は、筆跡の殘迹してゐるのを筆がれてゐる

などいふがら」と同じ語で、老練の意である。

*しがらむ 姫君も思ひ川、下行く

水とかよへども、さすが人目のし

がらみて、哀ればかなき世の中

や(十二段)

〔櫓〕築掛むの義か。櫓を作りて水流を堰く

を云ふ。この文は「行く水と云つた櫓で

「しがらみ」と云ひ、人目に驚かせる意にいら

たのである。

しかられぬ いかにしてもお手前

が親の敵に身を碎く、こがどう

もしかられぬ、脇差に手もかけま

い(薩摩歌)

〔然せられぬの略。我が身勝手に敢行するこ

とがでない。〕

*しぎ ヤアいはれぬ鳴殿、看經も

する身で、これがほんの殺生かい

(國性爺) 鳴の羽根掻き百羽掻き、

毛を逆立ててぞ諍ひける(國性爺)

〔鳴鶴なども書き、涉禽類に屬する鳥、水

邊に棲息し、唯も足も長く、體の大き中形で

ある。〕

〔鳴鶴看經〕とは、鳴の靜かに田畑などに佇む

さまをいふ。倭訓栞に、鶴が看經といへる俗

語は、その田邊に居時の閑寂なるをて也、

羽掻きの反也。吾吟我集秋の部に「羽根かき

の歌を所作に能鶴の看經をする鳴の聲」。

〔鳴の羽根掻き百羽掻き〕とは、鳴が嘴で鹿

繁く羽をこくをいふ。倭訓栞に「しぎのは

ねがき」鹿の己が羽にて羽をこく善の高く

聞ふればいふなり、其數もしげれば、百羽

がきとも數掻ともよみ、睨天に必ずかくもの

なれば、直に睨の事にいへるなりといへり。

古今集に「鹿歌五の部に「あかつきの鳴

の羽根掻き、百羽掻き、君がこね夜はわれぞ數

かく。錦木寛文頃成卷五に、「しぎのはね

がきとは、喉には鴨といふ鳥の羽をかくとや。(しきのはがへしはその條を見よ。)

***しき** 何しにお辭儀申しましよ、兩人ながらお茶はえたべませぬ(永朝日)

【辭儀辭退】この文は、辭退は致しませぬといひながら、兩人とも禮多なれば憚つて、お茶はえたべませぬと控目に由たのである。
色界の十八天 (天神記)

色界は三界の一である。その界に在るものは貪慾薄けれども、なほ五通(その條を見よ)の色心存するによつて名づく。大藏法數に「色即色覺、謂離離欲界穢汚之色、始從初禪梵天、終至阿迦膩吒天、凡有二十八天、並無女形、亦無欲染、皆是化生、尚有五色質、故名色界」。色界に十八天ある、即ち、梵衆天、梵輔天、大梵天(以上三禪天)、少光天、無量光天、光音天(以上二禪天)、少淨天、無量淨天、遍淨天(以上一禪天)、無雲天、福生天、廣果天、無想天、無煩天、無熱天、善見天、善現天、色究竟天(以上四禪天)。

***しきがね** 敷銀する手間取を尋ねられうも知れまい(薩摩歌 在所に座と親もあり、敷銀してあの下種めに使はれう答はない(卯月紅葉))

【敷銀】縁づく時の持参金。
***しきききやう** これ天人の住家にて善現・善見・色究竟天神記)

【色究竟】色界十八天の「色界の十八天」を見よ、諸塵機微の處に於て究竟せるによつてこの名がある。

***しきし** 色紙短冊かけちらし怪しき男伏してあり(伊豆日記)

【色紙】和歌などを記す料紙である、方形に莢ち模様を彫りて箔などを施したもの。其大なるは竪六寸四分、横五寸六分、小なるは竪六寸、横五寸六分。

***しきしま** 敷島の和歌の浦曲に(松風)あらまほしきは學力ぞや、我敷島もその通り目に見えぬ鬼神も三十一字に柔らぐる(虎が唇)

【敷島】もと讃岐島で、崇神天皇・欽明天皇の都し給はれた大和國にある地名である。よつて敷島の大和と云ひ、大和を日本の意としその枕詞となつた。そしてやまと歌を敷島の道と云ひ、略して敷島とも云ふ。「目に見えぬ云」とあるはその條を見よ。

***しきじやう** 四大天に空にかへせども、しきじやう天地れいれいともしきじやうの(天智天皇)

【諸情地】水火・風空の五大に諸を加へて六大といふ。諸は了別の義。心といひ意といひ識といひ、名の差別であつてその實は一心の異名である。情は佛書に意情などある情と同じである。この文に「れいれいと」とあるは阿彌陀、明らかな意である。諸情天地諸情としして朽せぬとは、緊念無量劫なるをいふ。

***しきしん** 色心の當體皆是阿彌陀佛(實教傳)

【色心】色は有形の物質、心は無形の精神。仁王經・上に「色心是衆生根本」。色心の當體云云とは、色心森羅萬象の當體皆これ阿彌陀佛の法體であるとの意。

***しきせ** 花車や娘仲居にまでしきせをして取らせうと、約束ばかりでまゐらば故(二枚繪) 酒はこぼすとしきせは厭(二枚雪女)

【仕着爲】徳川幕府から諸役人に四季に應じて被服を支給したもの、それから轉じて、時候に應じて主人から奴婢などに衣服を作り給金を添へて與へるのを云ひ、また客から與へるものを云うた。曾我物語に「四季をりやりの小袖を給ひ」と見え、鹽澤征傳に「四季給三時服」と見え、鶴峯茂申撰・海西漫錄に「しきせは四季著の約語なるべし」と云うてあれども、四季著また四季施でなく仕着爲者であらう。心中又は水の明日に「其代に酒飲ますと、挨拶もおしきせの、袂を戸欄に打擾ふ」とあるしきせは、仕着は定まれる給與物であるやうに、挨拶もきまり上の意にいうたのである。

***しきだい** 奏者番白洲に下りて色代し(加増曾我) 重忠に色代し棟梁座をぞ下りける(出世景清) 長者夫婦も色代し別れて旅宿に歸りける(振袖絶)

【色代】式退の義。禮を正し人を先にし我を後にするを云ふ。挨拶。會釋。
***しききつて** 天性名馬の相ありと、伯樂しきつて申すにつき(十二段)

【しきりて】つまつた語。頗に。
***しきのはがへし** 大わたし・鳴のはがへし(井筒)

【鳴羽返】相撲四十八手の一。兩手を差し相手の首を胸につけ、差した手で締付けるを云ふ。
***しきま** 妻の口縁にのりやかなる縁の肩・芙蓉の日元わさわざと、さつても熱い事かな・それそな椿の葉の水一つ下さんせと(卯月調色)

【椿木】繭科に屬する常綠灌木で、葉は、繭に似狭長である。芙蓉の頃小蓮華に似た淡黃白色の花を開く、枝葉は佛前や墓前に供へる。眞俗佛事編卷三に、「其樹形天竺無熱池の青蓮華に似たり、故に之を取りて佛に供す」。

***しきま** 式目を極め四天王の面、この所に會合し(弘徽殿)

【式目】式は法式、目は條目の義。武家時代に行はれた法現の稱。
***しきりぎん** この十七日岩國の紙のしきりぎんに才覺はしたれども(天細島)

【仕切紙】しきりがなともいふ。買主が賣主に仕送りさせた品物の價を支拂ふ總金額。取引決算の拂渡金。
***しきれい** 兩方鑑踏放し馬上に式禮、下下まで列を揃へて踞へり(川中島)

【式禮】色代に同じ。その條を見よ。
***しき** うけがたき御法を請け、四苦八苦を免れし御恩なも報ぜず(釋迦) 四大四苦を此身一つに重れ重れて(反魂香) 斷末魔の四苦八苦(會根崎)

【四苦生】老、病、死の苦を云ふ。「四苦八苦」は四苦に怨憎會苦、愛別離苦、求不得苦、五陰盛苦を加へたものである。これ吾人が生涯を通して必ず受ける苦痛であつて涅槃經に説いてある。轉じて四苦八苦に至極の苦痛の意にも云ふ。

***しき** 世尊は雪山童子の古、四句の文に身をなへ、鬼神の餌食となつてこそ正覺を成じ給ふなれ(酒吞童子枕言集)

【四句】四句偈である、即ち諸行無常、是生滅法、生滅滅已、寂滅爲樂の文であつて、涅槃經に説いてある。世尊は雪山童子の古云云を見よ。

***しき** 四方に四句の大庵紫磨黄金のまき柱(三世相)

【四句】この文は四方に吊す四つの大庵に各一句づつ、併せて四句の經文を書けるを云ふ。

のである。四句の經文は即ち、六字名號一通法、十界依正一遍體、萬行離念一遍證、人身上妙好華を云ふ。この經文の意は、南無阿彌陀佛の六字名號を一遍唱へれば、十界依正報悉く同一體に成佛され、總ての念慮を離れて一遍の念佛につて無上の妙果を證し、人間中の白蓮華に比すべき上上の人とならるると云ふのである。

しぐさ 今はずと襦袢と、たつた二枚の四九をやつて、親方の駄賃の算用も立てぬげな(丹波興作)

〔四九〕めくりかたるたて、四の札と九の札と二枚合せて十三を取れば賀けとなる。この文は、布子と襦袢との二枚に、かるた札の二枚をひかけ、めくりかたるたの博奕に賀ける意に、なほ四九三十六計述ぐるに若かずの壁をかきかたもので、要するに博奕に賀けて布子と襦袢との二枚となり、逃げて親方に拂ふべき駄馬賃の算用も立てないとの意。齊書・王敬則傳に敬則曰、權公三十六計、走爲三上計、云云。

しぐさ しばびこる外道のしぐさつの形、邪見風の嵐を吐けば用明天皇

〔しぐさつ〕「肅殺」であらう。物をそなひからすを云ふ。歐陽修の秋聲賦に、「常以三肅殺而爲心」。

*しぐせいぐわん 庭と上とに四人の願ひ四弘誓願ぞ有難き(會釋山)

つ端海へ突はめ鯨の餌食となすべきて(天智天皇)

「執念くねる」の義か。しつこくねぢけ反抗する。但書集覽に「くねる」といふ言あり、くねるとはねたみ恨むることなり。をみなへしの一時をくねると賀之も書けり、按に辨慶が狀に護るの詞に、勅して云云とある、即ちくねるの意歟。

しぐれのまつ 時雨の松の下寺町に、信心深き心光寺(會釋山)

〔時雨松〕大阪天王寺の西、一心寺にあつた名松の名だといふ。

*しぐわん 覺むる期ありや有明の、止觀の窓の月の影、峰の木隠れ雲隠れ常に照らすと知る時は(兼好)

〔止觀〕止觀止觀の略稱で、天台三大部の一である。摩訶止觀を修する道場を止觀の窓と云うたのである。

しぐいしや 渡殿よりしぐいしやの小庭に暫し身をひそめ(日本武尊)

〔渡殿〕青桐と云ひ、内裏の内にあてて宜露殿と藤原殿との間の後で嘉陽門の西に當り、女官たちの曹司にあてられてゐた。

しぐいと 下緒のふさのしげ絲を火口となしてかちかちかち(生玉)

〔絲絲〕藤の上皮から取つた屑の絲。和名抄に「絲絲。漢語抄云、絲絲、之介以度、願絲也」。

しぐはちけう されば幼少より學問し四教八教を覺え(二心河白蓮)

〔四教八教〕天台宗では釋尊一代の教法を分類して四教八教とす。四教とは(1)藏教、(2)通教、(3)別教、(4)圓教の化法を云ひ、八教とは以上の四教に(5)頓教、(6)漸教、(7)秘密教、(8)不定教の化法を合したものを云ふ。

しげさう 木木の梢も繁藏と、誰が呼子鳥草履取(薩摩歌)

木木の梢も繁に、好色の意の「しげらう」(その條を見)をひかけて、繁藏というて好色奴の名に擬したのであつて、強藏とふ類である。そして源五兵衛の情事の伏線である。

*しげとす 引もたざらぬ持弓の、重藤・塗籠その数は、いさや白木に側黒の(堀川波鼓)

〔重藤〕藤を長く巻く。藤を幅一寸ばかり、間を五分ばかり隔てて繋ぐ。いた弓を重藤の弓と云ふ。春草上に、藤を重く巻きたるは皆重藤なり、かくするにこそ唯弓の飾にはあらず、黒にあひてへの離れぬめなり、又九張弓と名付けて重藤九品の製あり、これも九品の名に照るべからず、重藤の藤は白藤なり、弓をば黒く塗るなり。重藤には村重藤、本重藤、塗籠重藤などの種類がある。重藤の名の見えは保元物語、義朝白河殿夜討の條に出てゐるが初めてあらう。

しげめゆひ 時に忠信滋目結の直垂に、絳絨の鯉を着、兜の緒を締め(吉野忠信)

〔滋目結〕目結は鹿子紋のことである。編布を織み上げて縁に結び染めれば、その文目をやうになる故にこの名がある。滋目結染にしたるを滋目結と云ふ。

しげる こちも盆にば在所へ行て粟畑でしげると、こころと寝たる音ばかり(今宮)

この蚊帳でしげらしやんとしたらば、いかな藪蚊もけなり(歌仙傳) 喜瀬川の三浦とて年まへの太夫、大彌太殿とは深い中、これも呼寄せられ、しげれ

松山美ましい(會釋山)

〔後〕こころの籠(籠)で、即ち男女籠ることであつて交接するを云ふ。好色狸御殿(元禄七年刊)「身を流る雨」の條に、多作と云ふ遊女に其情夫が情死を迫つたのを多作が諫めた言葉に、「夜の分別と晝とはいから違ふものでござんす、まづともあれ今宵はしげりましょ、こちへ寄らんせ、心細うなるに最早その事おかしやんせと見え入る。松の葉(元禄十六年刊)「ひらやこまつ」の唄に、「こは三條かやれ釜座か、一夜泊りてしげりまいし……」云云と見え、同しよまほそりの唄に「……うちとてゆらゆらとおれしめり、まだ夜は夜中よしげれんとと君云云」と見えてゐる。「しげる」はまたしげらと云ふ。

その條をも見よ。「しげれ松山」は、閑吟集(永正十五年刊)に「しげれ松山しげらうには木蔭にしげれ松山」とある歌の詞によつたものである。

*じげん 今、の婆婆に示現して(會釋山)

〔示現〕顯示顯現の義。佛・菩薩が御姿を現し給ふこと。御姿を變じて出現し給ふことある「げにや安樂世界より云云」を見よ。

しぐし くの矢管下りに負流し(吉野忠信)

〔矢管〕矢筈とも書く。もと矢を盛る器の總稱であつたが、後には粗末な胡麻を云ふ。

しぐさむ こりや三太郎そちに大事の物遣らう、火なとばして奥へ来いと言ふより早く、あいあいいさらばしこだめあゝらうと(重井熊)

熊の義であらう。どつきりたるを云ふ。日本永代藏(貞享五年刊)巻一・二代目に破る扇の條に、「この男一生の中、草履の鼻緒を踏切らず、釘のかしらに袖をかけて破

らず、萬に氣をつけて其身一代に二千貫目し
こためて行年八十八歳云云。風流曲三味線
(寛永七年刊)に、「色も知らぬ大徳無道の男
め、法師と心を合せ其方をたばかり賣りて、
金をしこためたるに疑ひなし。」
しこのき 上三尺の詰牢に、しこの
木をもつて蜘蛛手格子に切組ん
で(出世景清)

「しこの」に濁點の落ちたもので、「しこの
き」即ち「四五の木」の意である。果林子の出
世景清の文は、舞之本かきよ(下巻末刻記)
に萬治二年仲夏吉辰開版に據つた所多き
果林子のこの文も、かきよ下巻に「うへ
をば三尺のつめうらにこしらへ、四五の木を
とりよせ蜘蛛手格子にきりくんで云云」とある
に據つたものである。(さるををしこの木を醜
の木とする説はいかた)

*しころ しころ博打の惡遊び、扱も
つれない氣と思へば熱い涙がこぼ
る(丹波興作) 奥にはなほも飲み
しころ、踊るやら謡ふやら(生玉)

「しころ」(顔)に同じ。しきりにする。こりか
たまる。或る。萬葉集、卷七、聲歌歌の部に、
「あきじこりか」とありて、代匠記に「商じ
こりとはあきなひをしきりとするなり、しこ
りはしきりに同じ、こきと通ぜり」と見え
てゐる。西鶴廣土產、卷之四、戀風は米のあが
りの條に、「雨の降りしころは風と定めめ」
江島其儀撰、咲分五人娘、四之巻、由良三郎は
一日那やと威言を國分寺の條に「客殿に打
ちこつてある肩牌打ども肝を潰し」

*しころ 兜の鏝を取出し(出世景清)
(鐵兜の後に垂れて首を締ふもの。このあた
りの文は謡曲・景清に據つたものである。併
せ見よ。)

しころづきん 鐵頭巾に顔隠したる

荒男數十人ばらばらと駈集
(天智天皇)



「鐵頭巾」頭巾の一種。智恵袋(寛文年間刊
に、

*しこん 何のかのしこんじは敵
討が恐し(な(嵯峨天皇))
「自言辭自分につづて口上手にいふ書辭。節
用集(鐵頭屋本)に「自言」。但言集覽に「自言
辭さふ」。

*しさい 自在の下に焚捨てしほだ
押除けて(川中島)

*しさい 自在の下に焚捨てしほだ
押除けて(川中島)

しさい 自在の下に焚捨てしほだ
押除けて(川中島)

しさい 自在の下に焚捨てしほだ
押除けて(川中島)

る首おし切つて立ち上れば(女護國)
一世の大事と噛み切り噛み切り
しし切る念力佛力や加はりけ
ん(蛙合歌)

ししげしやう ししげしやうの燈火
をかかげて三會の曉の出世を契り
給ひける(以呂波)

ししげしやう ししげしやうの燈火
をかかげて三會の曉の出世を契り
給ひける(以呂波)

ししげしやう ししげしやうの燈火
をかかげて三會の曉の出世を契り
給ひける(以呂波)

ししげしやう ししげしやうの燈火
をかかげて三會の曉の出世を契り
給ひける(以呂波)

ししげしやう ししげしやうの燈火
をかかげて三會の曉の出世を契り
給ひける(以呂波)

で、其實神社佛閣とは別物で、宮中のは番
犬であつて、其姿が猛しう作られ、普通の犬
と違つて強く見えるのが高麗犬と稱せられた
のであらう。田村將軍初觀音(果林子)には「白
銀の獅子狛犬、階は唐木を以て造らすべし」
と書いてゐる。

四十八串彌陀の誓願 菫蕪は今夜食
はいでも明日までも置かるるが豆
腐が腐る、一丁を二十四に切り二
丁で四十八串彌陀の誓願、あゝ何
處ぞに阿彌陀の光はせぬかい(孕常
盤) 肌に給の破れ紙子、四十八枚
彌陀の願、つぎは平等施一切々
ここの文は、豆腐の四十八串を彌陀の四十八
誓願にいひかけて「四十八串彌陀云云」とい
ひ、また紙衣は四十八枚の紙で作るといふか
らそれを彌陀の四十八誓願にいひかけて「四
十八枚彌陀の願」というたのである。阿彌陀
佛の四十八誓願は佛說無量壽經卷上に出て
ゐる、即ち、(1)無三惡趣 (2)不更惡趣 (3)悉
皆金色 (4)無有煩惱 (5)宿命智通 (6)天眼智
通 (7)天耳智通 (8)他心智通 (9)神境智通
通 (10)速得漏盡 (11)住正定聚 (12)光明無量 (13)壽
命無量 (14)聲聞無數 (15)眷屬長壽 (16)難離不
善 (17)諸佛稱揚 (18)念佛往生 (19)來迎引接
善 (20)保命定生 (21)具足諸相 (22)必至補處 (23)供
養諸佛 (24)供具如意 (25)說一切智 (26)得金剛
身 (27)萬物嚴淨 (28)見道場 (29)得淨智智
身 (30)智勝無量 (31)見十方 (32)國土嚴淨 (33)觸
行 (34)入天致敬 (35)衣服嚴淨 (36)常受快樂
尊貴 (37)人天致敬 (38)名聞具足 (39)常受快樂
尊貴 (40)見諸佛土 (41)名聞具足 (42)名聞具足 (43)生
尊貴 (44)具足德本 (45)名聞具足 (46)隨意聞
法 (47)聞名不退 (48)得三法忍 (以上四十八
誓願の中に) (18)念佛往生願を根本の誓願とし

四十八串彌陀の誓願 菫蕪は今夜食
はいでも明日までも置かるるが豆
腐が腐る、一丁を二十四に切り二
丁で四十八串彌陀の誓願、あゝ何
處ぞに阿彌陀の光はせぬかい(孕常
盤) 肌に給の破れ紙子、四十八枚
彌陀の願、つぎは平等施一切々
ここの文は、豆腐の四十八串を彌陀の四十八
誓願にいひかけて「四十八串彌陀云云」とい
ひ、また紙衣は四十八枚の紙で作るといふか
らそれを彌陀の四十八誓願にいひかけて「四
十八枚彌陀の願」というたのである。阿彌陀
佛の四十八誓願は佛說無量壽經卷上に出て
ゐる、即ち、(1)無三惡趣 (2)不更惡趣 (3)悉
皆金色 (4)無有煩惱 (5)宿命智通 (6)天眼智
通 (7)天耳智通 (8)他心智通 (9)神境智通
通 (10)速得漏盡 (11)住正定聚 (12)光明無量 (13)壽
命無量 (14)聲聞無數 (15)眷屬長壽 (16)難離不
善 (17)諸佛稱揚 (18)念佛往生 (19)來迎引接
善 (20)保命定生 (21)具足諸相 (22)必至補處 (23)供
養諸佛 (24)供具如意 (25)說一切智 (26)得金剛
身 (27)萬物嚴淨 (28)見道場 (29)得淨智智
身 (30)智勝無量 (31)見十方 (32)國土嚴淨 (33)觸
行 (34)入天致敬 (35)衣服嚴淨 (36)常受快樂
尊貴 (37)人天致敬 (38)名聞具足 (39)常受快樂
尊貴 (40)見諸佛土 (41)名聞具足 (42)名聞具足 (43)生
尊貴 (44)具足德本 (45)名聞具足 (46)隨意聞
法 (47)聞名不退 (48)得三法忍 (以上四十八
誓願の中に) (18)念佛往生願を根本の誓願とし

四十八串彌陀の誓願 菫蕪は今夜食
はいでも明日までも置かるるが豆
腐が腐る、一丁を二十四に切り二
丁で四十八串彌陀の誓願、あゝ何
處ぞに阿彌陀の光はせぬかい(孕常
盤) 肌に給の破れ紙子、四十八枚
彌陀の願、つぎは平等施一切々
ここの文は、豆腐の四十八串を彌陀の四十八
誓願にいひかけて「四十八串彌陀云云」とい
ひ、また紙衣は四十八枚の紙で作るといふか
らそれを彌陀の四十八誓願にいひかけて「四
十八枚彌陀の願」というたのである。阿彌陀
佛の四十八誓願は佛說無量壽經卷上に出て
ゐる、即ち、(1)無三惡趣 (2)不更惡趣 (3)悉
皆金色 (4)無有煩惱 (5)宿命智通 (6)天眼智
通 (7)天耳智通 (8)他心智通 (9)神境智通
通 (10)速得漏盡 (11)住正定聚 (12)光明無量 (13)壽
命無量 (14)聲聞無數 (15)眷屬長壽 (16)難離不
善 (17)諸佛稱揚 (18)念佛往生 (19)來迎引接
善 (20)保命定生 (21)具足諸相 (22)必至補處 (23)供
養諸佛 (24)供具如意 (25)說一切智 (26)得金剛
身 (27)萬物嚴淨 (28)見道場 (29)得淨智智
身 (30)智勝無量 (31)見十方 (32)國土嚴淨 (33)觸
行 (34)入天致敬 (35)衣服嚴淨 (36)常受快樂
尊貴 (37)人天致敬 (38)名聞具足 (39)常受快樂
尊貴 (40)見諸佛土 (41)名聞具足 (42)名聞具足 (43)生
尊貴 (44)具足德本 (45)名聞具足 (46)隨意聞
法 (47)聞名不退 (48)得三法忍 (以上四十八
誓願の中に) (18)念佛往生願を根本の誓願とし

四十八串彌陀の誓願 菫蕪は今夜食
はいでも明日までも置かるるが豆
腐が腐る、一丁を二十四に切り二
丁で四十八串彌陀の誓願、あゝ何
處ぞに阿彌陀の光はせぬかい(孕常
盤) 肌に給の破れ紙子、四十八枚
彌陀の願、つぎは平等施一切々
ここの文は、豆腐の四十八串を彌陀の四十八
誓願にいひかけて「四十八串彌陀云云」とい
ひ、また紙衣は四十八枚の紙で作るといふか
らそれを彌陀の四十八誓願にいひかけて「四
十八枚彌陀の願」というたのである。阿彌陀
佛の四十八誓願は佛說無量壽經卷上に出て
ゐる、即ち、(1)無三惡趣 (2)不更惡趣 (3)悉
皆金色 (4)無有煩惱 (5)宿命智通 (6)天眼智
通 (7)天耳智通 (8)他心智通 (9)神境智通
通 (10)速得漏盡 (11)住正定聚 (12)光明無量 (13)壽
命無量 (14)聲聞無數 (15)眷屬長壽 (16)難離不
善 (17)諸佛稱揚 (18)念佛往生 (19)來迎引接
善 (20)保命定生 (21)具足諸相 (22)必至補處 (23)供
養諸佛 (24)供具如意 (25)說一切智 (26)得金剛
身 (27)萬物嚴淨 (28)見道場 (29)得淨智智
身 (30)智勝無量 (31)見十方 (32)國土嚴淨 (33)觸
行 (34)入天致敬 (35)衣服嚴淨 (36)常受快樂
尊貴 (37)人天致敬 (38)名聞具足 (39)常受快樂
尊貴 (40)見諸佛土 (41)名聞具足 (42)名聞具足 (43)生
尊貴 (44)具足德本 (45)名聞具足 (46)隨意聞
法 (47)聞名不退 (48)得三法忍 (以上四十八
誓願の中に) (18)念佛往生願を根本の誓願とし

四十八串彌陀の誓願 菫蕪は今夜食
はいでも明日までも置かるるが豆
腐が腐る、一丁を二十四に切り二
丁で四十八串彌陀の誓願、あゝ何
處ぞに阿彌陀の光はせぬかい(孕常
盤) 肌に給の破れ紙子、四十八枚
彌陀の願、つぎは平等施一切々
ここの文は、豆腐の四十八串を彌陀の四十八
誓願にいひかけて「四十八串彌陀云云」とい
ひ、また紙衣は四十八枚の紙で作るといふか
らそれを彌陀の四十八誓願にいひかけて「四
十八枚彌陀の願」というたのである。阿彌陀
佛の四十八誓願は佛說無量壽經卷上に出て
ゐる、即ち、(1)無三惡趣 (2)不更惡趣 (3)悉
皆金色 (4)無有煩惱 (5)宿命智通 (6)天眼智
通 (7)天耳智通 (8)他心智通 (9)神境智通
通 (10)速得漏盡 (11)住正定聚 (12)光明無量 (13)壽
命無量 (14)聲聞無數 (15)眷屬長壽 (16)難離不
善 (17)諸佛稱揚 (18)念佛往生 (19)來迎引接
善 (20)保命定生 (21)具足諸相 (22)必至補處 (23)供
養諸佛 (24)供具如意 (25)說一切智 (26)得金剛
身 (27)萬物嚴淨 (28)見道場 (29)得淨智智
身 (30)智勝無量 (31)見十方 (32)國土嚴淨 (33)觸
行 (34)入天致敬 (35)衣服嚴淨 (36)常受快樂
尊貴 (37)人天致敬 (38)名聞具足 (39)常受快樂
尊貴 (40)見諸佛土 (41)名聞具足 (42)名聞具足 (43)生
尊貴 (44)具足德本 (45)名聞具足 (46)隨意聞
法 (47)聞名不退 (48)得三法忍 (以上四十八
誓願の中に) (18)念佛往生願を根本の誓願とし

四十八夜 まんまと法然上人が彼方の十念授かり、諸分の五重相傳受け、四十八夜の常念佛互に忍び忍ばれて(薩摩歌)

彌陀の四十八誓願(前條を見よ)に因んで四十八夜間念佛を唱へる法會をいふ。日本永代藏卷三、高野山僧鑑の施主の條に「その跡の金銀寺へのあがり物、四十八夜を申てから役に立たぬ事なり。巢林子はこれを男女の情事に云うたのである。好色畢業庵子(元禄七年刊)和合の條に、男女の和合に四十八年あるといひ、傾城禁短氣に、四十八夜の夜見世談義と云ふことも見えてある。

しじふまつしや

「外官」は四十末社を見よ。

ししや 幾年ふりし猪の牙は劔の如くなるが、しし矢三つ四つ負ひながら(百日曾我) 革具足竹槍鹿矢かき負ひ(今川了俊)

「鹿矢」狩獵に用ゐる矢。

ししやう 「ろくどうししやう」を見よ。

ししゆ 大乘五十年の御法の聲、三乘五乘七方便四しゆ八部二十五有普く利益の甘露を咎め(釋迦)

「四乘」比丘(僧)、比丘尼(尼)、優婆塞(信男)、優婆夷(信女)。法華經、法華品に「爲諸菩薩及四衆、廣説は法華經、樂王我於餘國遣化人、爲其集聽法衆、亦遣化比丘比丘尼、優婆塞、優婆夷、聽其說法」。四衆は四部衆または四部弟子とも云ふ。

四種の馬

「雜阿含經」にも四種の馬を説かれを見よ。

ししゆのりゆうじん 三界の諸天を驚かし敬つてこの理を啓し、四種の龍神に向つてこの恨みをな

す(嵯峨天皇)

「四種龍神」日藏經・卷九に「阿奴歌等四龍王、護池出河、流無端見ええてある。但し四龍王、四種龍神に關することは別にあれは、必ずしもこれに限らない。

自受用即身成佛 禪師坊が最後に自受用即身成佛の御法を説いて聞かすべし(百日曾我)

自受用は他受用に對する詞である。自ら佛果を證得しそれを自ら受用して、當身佛果菩提を成就すること。

ししよく 御座の右は四職の棟梁

三好長慶入道が嫡子淡路守國長(女夫池)

「四職」左京職、右京職、大膳職、修理職。「ししき」を見よ。

ししよきやう 四書五經を宙で讀む女子でも役に立たぬぞ

や(堀川波鼓)

「四書五經」大學、論語、孟子、中庸を四書と云ふ。

ししよみやうじん 四所明神の黒木

の小祠、雪は白木綿、藤は幣(大體意)

「四所明神」春日社(武甕槌命、大甕主命、天兒屋根命、姫御神の四神を祀つてある故に云ふ。

じしんはん

通れぬ方の自身番見舞ひ一夜を寝すれども(重井簡)

自身番(八景)

「自身番」江戸時代に町人が一町毎に晝夜非常を警戒する爲に互に交替して番をし。之を自身番と云ひ、その所を自身番屋と云ひ、略して自身番とも稱し、自治機關の一であつた。

しする 蘭麝の香よこをれてしする

を流す堀江(三國志)

「脂水」脂粉を洗つた水、杜牧の阿房宮賦に「渭流漲膩、棄脂水也」。

四睡の虎 「豐干禪師」を見よ。

四寸の身 まつかせと開く四寸の身、鎧と鎧とがかつしと當つて(川中島)

敏速に身をかはして、敵の突き来る鋒鏑より四寸の距離に外すこと。

しそく さあさあ紙燭が皆になる、

何と房様(重井簡)

「紙燭」紙捻に油を塗って蠟燭の如く火を點すに用ゐたもの。この文はこの先の文に「引裂紙のひねり元結で火燭しを」とあれば、引裂紙のひねり元結を紙燭に代用したのである。

しだい 上は梵天帝釋下は四大の文言に佛そへ神そへ(天淵島)

「四大」四大天王の略である。即ち持國天・廣目天・增長天・多門天の四大天王をいふ。「してんわう」を見よ。起請文の書式は何れも大同小異であつて、即ち起請を立てる事柄に就いて違ひある由を記し、その末に「梵天帝釋四大天王惣而日本國中小神祇殊氏神何大權現八幡大菩薩摩訶支尊天可畏靈御者也仍起請如件 年月日 姓名 宛名」と書いてあるのが一般である。この起請文は牛牛の誓紙の裏に書いたものである。「ごわう」を見よ。

***しだい** 假にやどりし四大の體をここに殘して見するなり(心五戒)

魂、四大の四苦を此身一つに重ね重れて、空より出て空にかへせども(反魂香)

「反魂香」四大は空にかへせども、識情天地麗麗と朽ちせぬもの(天智天皇)

「四大」色法の所依たる四種の法、即ち四大種の略稱であつて地水火風を云ふ。地水火風は萬物の根源一切萬物の四大原素である。これに空を加へて五大(ごりん)を見よ。と云ひ、更に識を加へて六大と云ふ。四大の性質をいへば、堅にして物を持するは地、濕にして引接するは水、煖にして燃せしめるは火、動きて生長せしめるは風である。

***しだい** かい 四大海は汲干すとも

人の心は汲まれぬぞや(松風)

「四大海」須彌山の四方をめぐる大海をいふ。諸曲身是に「げにや恩愛愛執の涙は四大海より深し」。

***しだい** さいた 五大明王・四大薩埵・三十七尊(羅睺)

「四大薩埵」法華の四大菩薩、即ち彌勒・文殊・觀音・普賢を云ふ。「さいた」はその條を見よ。

***しだう** 唐土育王山佛照禪師の御寺(祠堂に御渡し候(孕常盤)

銀五百枚奉納致され候(萬年草)

「福智」寺院にて祖先代々の靈を祀る廟を云ふ。「祠堂」は祖先代々代供養の爲に菩提寺に寄附する金銭。

したかせい やい男だてはおいてくれ、錢濟いてしたかせい、腕づくならさあ来い(丹波興作)

「爲度」は爲よつまつた言葉である。

***したがひ** 小蛇跳出で松風の下がひに飛入れば(松風) 馴染重れししたがひの、つま戀しさに参りたり(持統天皇)

「持統天皇」 ちらちらちらら螢光か、いや兄弟の亡き魂も、結止めか、下がへの棲穴返す夜風、(會稽山)

「下交」したが(へとも)云ふ。衣のしたまへ。この語は古くは宇津保物語、徒衛の巻、源氏物語

語、姿の容などにも見えてゐる。「結びとめても云々」の條を見よ。

***したさんずん** 男も女も慎むべき
〔舌三寸(蠟山姥)〕
〔舌三寸〕三寸は舌の長さ云ふたのである。前漢書、張良傳に「以三寸舌爲帝王師」。毛吹草に「舌三寸のさへぐりに五尺の身をはたす」。

したぞめ 地體旦那の下染はの、重井筒屋と云ふ南の茶屋の弟で(重井筒)

〔下染〕紺屋で或色を染上する前に他の色で染めることを云ふ。この文は紺屋に縁ある語をつかひて生立ち又は業生の意に云ふた。

***したたむ** 何れも勝手へ立つてしたためしたため、我も飯食ふ膳を出せ(酒呑童子)

〔飯〕食事する。支度する。序に云、源氏冷泉節に「六尺どると呼ばはれども、皆したために歸つて草履取の三平ばかり」とある「した」は名詞であつて食事の意。

***したたるい** 今は手代と埋れ木の、生醬油の袖したたるき、戀の奴に荷ばせて(曾根崎) とてもなら連れ立たう、はて見苦しき女夫づれ、我も追付けまづ先へ、ああそれもさうしたたるさうにもなるまい(鎌田) ああしたたるい、手の隙がない通りや通りや(反魂香)

〔舌意〕めき甘える貌。でれでれしい。會根崎心中のこの文は、でれでれするに生醬油の袖滴るに梅をいかけた。醬油屋の徳兵衛今は手代で埋れ木の如く名も顯はれなども、後にはでれでれする戀の奴となつて浮名を流すといふに、奴に醬油梅を荷はせてをい

ひかけたのである。

***したながし** 檢非違使勝船が鹿相とは舌長し(用明天皇) 身が生國は

大日本、風來とは舌長し(國性寺) 耶輸陀羅女を渡せとは、どれどの口で舌の延びたる奴ばら(釋迦)

〔舌長〕舌の延びたといふ云ひ、言過ぎる者を罵つて云ふ。詩經大雅に「婦有舌長舌維亂之階」。普風傳授手習鑑佐太村の段に「やあ畜生とは舌長な」。

***しだら** 子は覺えなき事ながら、言譯もなきしだらとなる(二枚繪) 明け暮れの願ひ事叶はぬのみか、このしだら生玉 何としたしだらで何方へ立退きやる(博多)

〔しだらう〕しだらであらう。ほど拍子の義より轉じて、工合、都合、體たらく、の意をなす。爲たらくなどの略といひ、或は梵語修多羅から出たといひ、又は自墮落のかはつた體であるとの説もある。

しだん 愚僧代代師檀の好み故かくまへ置くに憚なし(天鼓) 大海原の王子の師檀となり(餘眠天皇)

〔師檀〕師匠と極超(施主)。師弟。説法明眼論に「二日師檀、百劫結縁」。しだんだふむ「おだんだふむを見よ。しち 吳竹をしちといひ(釋迦) 〔ひつたや〕の條を見よ。 *しち なほしと思ひ深草の、しちに通りし車長持(卯月潤色) めぐり車の少将様、榻の敷數百介が(扇八景) 〔榻車〕の轆を貫く轡であつて腰掛の狀をしたもの。この文は、深草の少将が小野町に懸想し、百夜まで通ふことを約し、その通

うた敷を車の榻に刻み附け、九十九夜まで通うて今夜といふ時になつて死し、遂に思ひを果さんだといふ故事によつて文を飾つたのである。

しちかく 太子は圓智明らけき御顔、七覺を表して七歩み(釋迦)

〔七覺覺は覺りの義。覺法に七種ある。即ち(1)擇法覺支、(2)精進覺支、(3)喜覺支、(4)輕安覺支、(5)念覺支、(6)定覺支、(7)行捨覺支と云ふ。道を修して思慮を斷ずることはこの七覺の力による。]

しちく 紫竹交りの藪の下(蠟丸) 簞の竹も古の紫竹に染むるばかりなり(反魂香)

〔紫竹〕漢竹をいひ、表皮紫色である。傾城反魂香のこの文は、昔時舜帝の二妃(娥皇女英)が舜帝の死を悲んで、泣いた涙が落ちて竹を紫色に染めたと云ふが、我が影竹も涙の爲に紫色に染まるばかりであるとの意。續古事談六に、「この二人(娥皇女英)舜におくれて嘆きける涙をみたる竹なり云云」と見えてゐる。

七九寸 腰にさいたる七九寸、かたづけしに半切紙(持統天皇)

延紙の大なるものは縦七寸横九寸あるより、これを七九寸といふ。和漢三才圖會卷十五、紙の條に「延紙、乃倍、小杉原也、其大者横七寸九寸、縦七九寸、云云」。この文は七九寸を一尺六寸の刀にひかけたのである。一尺六寸を七九寸といふやうに數をわけていうた例は、丹波製作にも「その七二とは九郎助のことか」とあるそれである。

***しちごさん** 相模入道が七五三も天に背けばこの犬の餌に劣つたり(千疋犬) 朝鮮人の斐應御堂へも雇はれ七五三、五五三、山蔭中納言の家の切方料理一通りは承り傳へし故(庚辰申) 男は今日の七五三、嫁入事せし戯れも(反魂香)

〔七五三七五三〕五五三も膳立の法式である。貞丈雜記に「七五三の膳と云ふ事。七とは飯にてもめ湯漬にてもあれ七の膳まで出すなり、五とは初獻(雜羹をへ着鯉のあつもの)、二獻まんぢうをへ着鯛の羽りなり、三獻(鯛のあつもの、四獻(又し菱をへ着たりはなやき)、五獻(やうかん又はすしせんかんをへ着鯛の「こん養)、三とはきやらの膳也三の膳まで出す也、料理調練丁人の家に定法あり、右は大草流なり、流によりて替るべし、五五三と云ふは七五三を略して飯にても湯漬にても五の膳まで出すなり。婚禮の夜の膳部は七五三である。女重寶記卷二、祝言の夜膳部食ひ物の次第の條に「二番に手かけ、二番に三方、三番に引わたし、其次にわたりの吸物、その次にうちみ、其次に雜羹、雜羹の餅は切餅にすべし、其次に膳の吸物(鯛也)、其次にかはりの吸物(鳥也)、其次に養膳七五三なり。一から九に至る奇數を陽の數で芽出度いものとす、其中の七五三の數をとつたもので、祝儀に用ゐる數である。

***しちじやう** 五欲七情種種の罪(蠟山姥) 是ぞと名付けん御病氣もなく、只七情に破られ給ひ、お氣の疲れ御心のむすばふれ(女護身)

〔七情〕釋氏要略に、喜、怒、憂、懼、愛、憎、欲を

いひ、誓書に、喜・怒・憂・思・悲・恐・驚を云ふ。(總記總述)に「何謂人情、喜怒哀懼愛惡欲、七者、不學而能」。

しちしよ 合戦勝負の理非を述べたる七書をよくよく御得心あり(最明寺説)

〔七書〕兵法の七書を云ふ、即ち(1)孫子、戰國時代齊の孫武の撰、(2)吳子、周時代吳起の撰、(3)司馬法、司馬穰苴及び周の軍官の長が説いたものを編輯したもの、(4)唐太宗李衛公問對、俗に李衛が太宗と兵を談じた筆録と云へど實は或兵學者の撰であらう、(5)尉繚子、周の尉繚の撰、(6)六韜、俗に周の呂尚の作といへど實は戰國以後の或兵學者の撰である、(7)三略、黃石公の作といへど實は後人の依托である。

しちせい 九曜七星二十八宿五行の靈三十六禽驚し奉り(弘微殿)

〔七星〕北斗七星を云ふ。「ほく」とも見ゆ。諸曲鐵輪に「九曜七星二十八宿を驚し奉り」として五事七政を秋津洲に施し給ふぞ有難き(關八州)

(七政)壽經、舜典に、「在二璇璣玉衡、以齊七政」とありて、吳澄謂、日月五星之運行、各有順序度數、如國家之政、故謂之七政に。

しちだうがらん 七堂伽藍御建立の功德はこれにばよもまさらじと泣入り(願八景)

〔七堂伽藍〕(1)三門、(2)佛殿、(3)法堂、(4)厨、(5)僧堂、(6)浴室、(7)東司を七堂といふ。七堂具備した寺院。「伽藍」はその條を見よ。

しちのづ 紺のだいなし裾七のつまで引つからげ(寄康申)

「さんのづ」の條を見よ。

しちはうべん 三乘五乘七方便四種八部二十五有普く利益の甘露を告め(釋迦) 願くば五乘三乘七方便諸天諸神加被を垂れ(聖德太子)

〔七方便〕佛道修行の位である。即ち小乘の五停心、別想念處、總想念處の三位、及び煩瑣、忍、世第一法の四聖根位を云ふ。これ等の七位は伏魔の位なれば、よつて以て未だ斷惑位にあらざる衆生をさして云ふ。

しちふだ太子 この禿と申すは、じやうびん大王の御子しちふだ太子と申せしが(藥物抄)

實は藥物の預り證として、眞屠が眞主に渡しおくれし慈達太子(Siddhartha)釋尊在俗中の名)とをいひかたのである。

しちぶつ 四大菩薩三十七尊過去七佛冥道を請じ驚し奉り(羅摩)

〔七佛〕藥王經に、毘婆尸佛、尸棄佛、毘舍浮佛、拘留孫佛、拘那含牟尼佛、迦葉佛、釋迦牟尼佛を云うてある。

しちぶつやくし 内にこめたる五大明王六觀音七佛藥師の御産の守(女夫池) 七佛藥師一字きんりん(嵯峨天皇)

〔七佛藥師〕(1)善觀名吉祥王、(2)寶月智嚴首自在王、(3)金色寶光妙行成就、(4)無量最勝吉祥、(5)法海智首、(6)法海勝慧遊觀神通、(7)藥師琉璃光、以上の七如来を云ふ、(1)より(6)までは(7)の藥師佛の分身である。七佛藥師の理を造り、皇災または安産などの祈禱をなす修法を七佛藥師法と云ふ。

しちべん 玉座に續いて大理卿大江の匡房、三公九卿八座七辨席を連れ(偶田川)

〔七辨〕左右の大中少の三辨に、權中少辨の一

人を加へて云ふ。
*しちほう 七寶莊嚴の羽車(用明天皇)
(七寶)七つの珍重すべき寶を云ふ。無量壽經に、金・銀・瑠璃・頗梨・珊瑚・瑪瑙・水晶・大智度論に、金・銀・瑠璃・頗梨・珊瑚・瑪瑙・赤珠を云うてある。

*七枚起請 變るまいとの七枚起請書いて二人が取交す(生玉) 幾夜幾夜の憂き勤、七枚起請空誓文、日本國の神様を欺した罪か(女腹切)

起請は誓ひ交である。これを熊野權現または二月堂などから出す生玉の誓紙七枚を總合せて書く、これを七枚起請文と云ふ。色道大藏に、二月堂生玉誓紙七枚に御字に起請文を書くこと見え、好色攝忍破袋寶永八年刊)巻一に「願性な事には人ごとにながら入道きて、半枚でも埒の明きさうな物を七枚起請などくどう書かせて取りたがるものをかし」と見えである。「きじやう」「ごう」を見よ。

*じちめ 諸國に弘め給ふよし幸の結縁、そと聴聞申度く候とじちめらしきひければ(心五戒鬼)

〔實目〕眞面目。和訓釋に「じちめ。俗語也、實面也といへり」。

*しちやう 入鹿が仕丁五六人ひしひしと打みしやがれ、同じ枕に死してげり(大藏經)

〔仕丁〕貞丈雜記辨に「仕丁とは人の召使ふ人夫なり、仕はつかふなり、丁はさかん」とみて年齢壯に強き者を云ふ、……この説非なり、丁は下男と云ふ義なり、仕丁羅興丁恩丁匠丁などの丁なり、歌によぶるとよむ。「しち」を見よ。

しちりけんはい 自ら御威勢衰へ國家の大事となること鼻の先にぶら

つけども、諫言申す人は七里けんばい、毛鈴頭の長慶狸大淀狐どれぞ一匹踏殺さんと存じての狼藉安夫池

〔七里〕結果(結果はその條を見よ)を「しちりつばい」と説き、更に「しちりけんばい」となつたのである。思はれし事など人の言ふを嫌うてよせつけぬ意にふくむ。弘法大師行狀記十に「惡神等は皆我結果七里の外に出去。異本ト惡神歌集に、「七里けんばい花によき」香の風。

*しづ しづも昔は戀をみがき年中廟へ入ひたり(渡邊) 君さへ合點なるるればしづが竿になるちやげな卯月紅雲、

〔しづ〕下づの義、下地。拙者(幫間などの用ひ大目稱代名詞を釋書業のやうに用ひたものである)。

*じつかい 一心則十界に遍滿して自在をなすを佛といふ(用明天皇)

一念佛性三世十方に通達し、十界一心平等大慧有無の間の中道實相、上天の事は聲もなく香もなし(大藏經) 見よ見よ十界の内に魔界なし、一界けんぜんたれば九界降伏す(源經)

〔十界〕地獄・餓鬼・畜生・修羅・人間・天上・聲聞・緣覺・菩薩・佛、以上の十界は普皆一心の所作であつて、その體差別無かるべきである。この平等の理を證し實智を得るを、「十界一心平等大慧」と云ふ十界の内に魔界なしと云ふ」とある一界は十界中の佛界を指すものなるべく、「けんぜん」は現前に顯現の意である。地獄界乃至佛界の十界中には魔界なく、佛界が顯現した時には、佛界に對して他

の九界は悉く迷の境界なるによつて、佛界の
知見に降伏して顯現せむとの意。

しつきやく 五客六客しつきやく
しつきやく(雪女)

じつきん 「じつきん」を見よ。

じつごう 實語教・童子教・和漢朗
詠(光明寺殿)

じつごう 實語教・童子教・和漢朗
詠(光明寺殿)

じつごう 實語教・童子教・和漢朗
詠(光明寺殿)

じつごう 實語教・童子教・和漢朗
詠(光明寺殿)

じつごう 實語教・童子教・和漢朗
詠(光明寺殿)

じつごう 實語教・童子教・和漢朗
詠(光明寺殿)

じつごう 實語教・童子教・和漢朗
詠(光明寺殿)

じつごう 實語教・童子教・和漢朗
詠(光明寺殿)

しつきやく 五客六客しつきやく
しつきやく(雪女)

しつきやく 五客六客しつきやく
しつきやく(雪女)

畜生も出生の門は唯一つ(露迦)

じつごう 豫て相圖の小屋の者、十
手捉げくるくるとおつとり巻
き(博多)

しつと 郵都蒼鷹の忠臣の翼も折
れ(堀山姥)

しつと 郵都蒼鷹の忠臣の翼も折
れ(堀山姥)

しつと 郵都蒼鷹の忠臣の翼も折
れ(堀山姥)

しつと 郵都蒼鷹の忠臣の翼も折
れ(堀山姥)

しつと 郵都蒼鷹の忠臣の翼も折
れ(堀山姥)

しつと 郵都蒼鷹の忠臣の翼も折
れ(堀山姥)

しつと 郵都蒼鷹の忠臣の翼も折
れ(堀山姥)

しつと 郵都蒼鷹の忠臣の翼も折
れ(堀山姥)

しつと 郵都蒼鷹の忠臣の翼も折
れ(堀山姥)

しつと 郵都蒼鷹の忠臣の翼も折
れ(堀山姥)

しつと 郵都蒼鷹の忠臣の翼も折
れ(堀山姥)

十方善をいひかけたのである。十方善は福上
の語で、甲申より癸巳までの十日間をいひ、
この間は相談調はぬと云ふ。「十方日那の福
田云々」は「福田宿植徳本」を見よ。

しつはく 五色の鬼ども呆れ果て、
扱も扱もしつぱくなる念佛者や、
最早地獄へ歸るなり、行き度い方
へつと行けと念佛往生記)

しつはく 五色の鬼ども呆れ果て、
扱も扱もしつぱくなる念佛者や、
最早地獄へ歸るなり、行き度い方
へつと行けと念佛往生記)

しつはく 五色の鬼ども呆れ果て、
扱も扱もしつぱくなる念佛者や、
最早地獄へ歸るなり、行き度い方
へつと行けと念佛往生記)

しつはく 五色の鬼ども呆れ果て、
扱も扱もしつぱくなる念佛者や、
最早地獄へ歸るなり、行き度い方
へつと行けと念佛往生記)

しつはく 五色の鬼ども呆れ果て、
扱も扱もしつぱくなる念佛者や、
最早地獄へ歸るなり、行き度い方
へつと行けと念佛往生記)

しつはく 五色の鬼ども呆れ果て、
扱も扱もしつぱくなる念佛者や、
最早地獄へ歸るなり、行き度い方
へつと行けと念佛往生記)

しつはく 五色の鬼ども呆れ果て、
扱も扱もしつぱくなる念佛者や、
最早地獄へ歸るなり、行き度い方
へつと行けと念佛往生記)

しつはく 五色の鬼ども呆れ果て、
扱も扱もしつぱくなる念佛者や、
最早地獄へ歸るなり、行き度い方
へつと行けと念佛往生記)

しつはく 五色の鬼ども呆れ果て、
扱も扱もしつぱくなる念佛者や、
最早地獄へ歸るなり、行き度い方
へつと行けと念佛往生記)

しつはく 五色の鬼ども呆れ果て、
扱も扱もしつぱくなる念佛者や、
最早地獄へ歸るなり、行き度い方
へつと行けと念佛往生記)

しつはく 五色の鬼ども呆れ果て、
扱も扱もしつぱくなる念佛者や、
最早地獄へ歸るなり、行き度い方
へつと行けと念佛往生記)

しつはく 五色の鬼ども呆れ果て、
扱も扱もしつぱくなる念佛者や、
最早地獄へ歸るなり、行き度い方
へつと行けと念佛往生記)

いへりて見え、由之軒政房撰 好色文傳授(元
祿十二年刊)巻四に、「小袖一つに二人髪に見
ぬ銘銀鳥の面影、深沈過ぎたるお床ふり」と
あつて「深沈に」しつぱりと傍倒してある。

*して して切掛けて神よ神、途にせ
てたべとれきごとの(偶田川)

*して して切掛けて神よ神、途にせ
てたべとれきごとの(偶田川)

*して して切掛けて神よ神、途にせ
てたべとれきごとの(偶田川)

*して して切掛けて神よ神、途にせ
てたべとれきごとの(偶田川)

*して して切掛けて神よ神、途にせ
てたべとれきごとの(偶田川)

*して して切掛けて神よ神、途にせ
てたべとれきごとの(偶田川)

*して して切掛けて神よ神、途にせ
てたべとれきごとの(偶田川)

*して して切掛けて神よ神、途にせ
てたべとれきごとの(偶田川)

*して して切掛けて神よ神、途にせ
てたべとれきごとの(偶田川)

*して して切掛けて神よ神、途にせ
てたべとれきごとの(偶田川)

*して して切掛けて神よ神、途にせ
てたべとれきごとの(偶田川)

*して して切掛けて神よ神、途にせ
てたべとれきごとの(偶田川)

用ゐて文飾したのである。

しなもの さも若しく結立てて、

さあお年を八十取つてのけ、跡が

十七花ざかり、ぼつとりものけ、し

なも様の、おやふいふいとぞ

響めにける(井筒) それは兵これ

等はしな者通り者、桂櫓の裾長廊

下、御寝所近く相詰むる(關八州)

「品者」嬌態媚容の女をいふ。「しなは」しなや

かしの「しな」と同じ語で、なまぬいし義。

好色伊勢物語(貞享三年刊)に「ぬれもの、い

ろ好む女をもいひ、すぐれたる姿をもいふ、

ぬれもの、しなものとふも同じ詞なり、吉

彌といふ女方を譽めていひ出したる詞とぞ。

旅枕(元禄八年刊)に「さても世にいふな品

ものとはいかなるをいふぞといへば、風俗

しやんとしてべたつかず、物言ひますまひ

心の付けて思はくをかけ、ただ打臥すとても

姿優しく、ひとりとはとても物の隙間などより

み、人のかきまみ事やと心まななくしたけ

にて、やさしきを品者といふ也。御前義經記

(正徳二年刊)卷一、傾城の因縁の條に「前漢

書とやらに、李夫人と云ふぼつとりもの品

ものはめ詞に、北方有佳人、絕世而獨立、

一顧傾人城、再顧傾人國」。

***しな** 御家中の方へ鼓の指南

仕り(堀川波敷)

「死」人を叱り又は罵るときに、その言葉を強める爲に、「生」又は「死」の語を指す詞の上に添へていふ。こゝには「死」の添はつてゐるのを擧げたのである。「いき」を見よ。

***しにす** 店一軒の主になり商賣もしにせて、親方一家を振舞ふとは(今宮)

「しにす」(爲似)で、父祖の家業を守り繼ぐ老舖の義)を動詞にした語で、商賣を漸次に仕上げて繁榮にするを云ふ。心中天網島巻に「商賣は所がらなり、しにせなり」とある。「しにせ」はこの語の名詞である。老舖。井原西鶴撰本朝櫻陰比事卷一、太極の中は知らぬが因果の條に「僅少四目目に足らざる借鏡、これにて數年のしにせをやむる事あるべきか」。

しにばかり 兄弟の男子に前興後興昇かれて、あつぱれ死光やらうと思つたに(女殺)

「死光」死後の光榮。死にばえ。井原西鶴撰日本永代蔵卷五に「其一事一代は樂といふ事もなく、子孫の爲によき事を十八に於て空しくなりぬ、死光のして折しも十月十五日」。

***しのぎ** 兄弟今を限りと死ぐるひ、大勢に渡り合ひ鎧を削り戦ひける(聖徳太子)

「鎧刀」のむねに高く聳えたる所の稱。鎧を削る」とは刀を打合ふ義であつて、烈しく切合ふを云ふ。曾我物語・祐成討死の條に「鎧をけづあひ時を移して戦ひける」。

しのづか われが今重井筒としのづかに、言はれ岩井の半四郎(重井筒)篠塚次郎左を見るときは、大佛島を思出す(今宮)

「篠塚」大阪の歌舞伎役者篠塚次郎左衛門を云ふ。寶永六年頃まで敵役を勤めて後に立役に

なつた役者謀火燧(寶永七年刊)立役之部に

「上上白吉。篠塚次郎左衛門。今難波の當り

男は篠塚。諸人かにはゆがられ、實惡にして

片岡殿よりよいといひの評判、諸見物手を入

れ、なんなく寶方になりました。……去年

まで實惡で、黒吉の御位、當年より立役め

白吉、やせ肉な音羽殿と引合、大兵なれば引

取つて來年は黒吉、今宮心中のこの文は、

篠塚次郎左衛門が大兵なるによつて、奈良の

大佛をきかせて大佛島と云ふたのである。

***しのび** もとより三保谷折よくば討ち奉らるん心、忍の柄に手なか

け(吉野忠信)

「忍」忍刀の略。

***しのびがへし** 大門變じて鐵門の忍がへし(忍の山(用明天皇))

に尖つた竹又は釘などを突出した櫓

のぶずり 奥州の錦木忍摺、いづれ奥(戀所(源義經) 茶宇の袴のし

のぶずり、亂れ逢ひし密通の(雪女

この春嫁入つて人中なしのぶもち

すり信夫布、折目正しく着こなせ

(最明寺殿)

「忍摺」布帛に忍草の莖葉を種種の色に摺附けたものに、陸奥信夫郡から産出した。忍摺はその文圖髪やうに振れるさまなれば、忍摺亂れ」とも「忍摺摺」とも云ふ。古今集・戀部の歌に「みちのく忍摺摺たれゆゑに、亂れそめにしわれならぬ」。

しのべだけ 向の藪のしのべ竹、五加木交りの籬や(露野) まばら朽ち

たるしのべ竹、踏込む足を踏留め

(博多)

節延竹の義であらう。「しのめだけ」た「めだけ」とも云ひ、節と節との間の長い竹である。生垣に植ゑ、またこれに切つて縁に張る。雍州府志貞享三年刊)六に「竹。一種、莖細長、而其葉片大也、是稱女竹、又謂之忍竹、是比並而爲垣、又半破之縱橫結束之、爲牆壁之骨、或貼銅則」。遊遊策策・一に「しのべは節延なるべし、江戸などにはしの竹と略呼す」。

しのをづく しのをづくなる吹き降りの雨の足音風の音(加増曾我)

のをづくなる吹き降りに(川中島)

しのは篠「つく」は束ぬの義である。篠を束ねたやうに降る雨の意で、臺雨のさまを形容して云ふ。

しばうち 冠の板より芝打まで、金具に打つたる忍草(三國志)

「芝打」草摺の下端。裾をいふ。

しばさき 六義を正す柴崎に思案橋を思出す(今宮)

「柴崎」柴崎林左衛門をいふ。大阪の歌舞伎役者で立役を勤め、家老役などを得意としてゐたことが役者謀火燧。(寶永七年刊)に見えてゐる。この文は、柴崎が家老役などを勤めて、六義その條を見よ)を正し思案分別するを、思案橋にひかかけたのである。

四八の相好

「さんじふにさう」を見よ。

しばつなき 雲雀の床の芝繫、とある所に乘しづめひらりと飛んで下り給ひ(小栗判官)

「芝繫」と云ふ本朝弓馬要訣(寶永足易集)に、芝繫之事。芝繫は芝には馬は繫き難し、繫き

しなもの——しばつなき

かねたる芝野にも此教を以て賑ぐべしといふ
心にて、芝藁とは古人の名付たるなり。

*しばりくび 兄が知れば親が知り、
髪を剃さぬ其内に縛首打たるる沙
汰(薩摩歌)

*しばん 今は布子と襦袢とたつた
二枚(丹波興作)

*しびとばな いづそ殺して死人花に
して貰ひたい(千正犬)

*死入花 曼珠沙華の異名。物類稱呼卷三、
生植の部に「石蒜」中國及武州にてしびとはな
又びがなばな又きつねのかみそり、……ま
んじゆしやげと云有種類なり」。山麓堤防な
どに自生する多年生草本で、地下に水仙に似
た鱗莖を有し、秋季一尺許の花軸の頂端に紅
色の美花を開き、花鱗は六片、雄雌蕊は長く
花外に突出す。

*四百四病 薬の湯元と聞くからに
四百四病は消えもせん(反魂香)

人の病を種別して百一の風病、百一の黃病、
百一の痰病、百一の癰疽病、總て四百四病あ
ると云ふ。大智度論に、「四百四病者、四大爲
身常相害、云云」。

*じふあき 十惡五逆の罪を覺し
(歌念佛)

十惡人の此治兵衛死に次
第とも拾置かれず、跡から跡まで
御厄介(天綱島)

じふかいごく 十界互具の本尊より
血を出せし嚴罰立どころに報い來
て(大覺)

じふかいのわか 「じつかいのわかを見よ。
「十界互具」一代大覺鈔などに見えてある語
で、十界互に十界を具せることで、一念三千
の根基の法門をいふ。

*しぶく 縮緬は風にしぶき面倒な、
重れておけろ是なくれる(寄庚申)

しぶく 寝る時は揉圖でしぶいてこ
い、先それまでは一杯あけてしよ
げるべい(女橋) 幸ひあたりに入
もなし、ちとしぶいて見せませう
と(西王母)

「そびくし」しぶくといひ、更に「しぶく」
と説つたのである。例からひく。語ふ。和訓
琴に「そびくし人をそびくといふは傍事の義
なるべし」とある。蓋し「おびく」「欺き誘ふ
意」も帯引くの義なら「そびく」も衣引くの義
であらう。

*じふく 樟着黄金時服さまさま音
物持たせて(反魂香)

「時服」その時候に相應する衣服(この語の用
みられてある古いものには、續日本紀卷十
二、聖武天皇天平八年冬十月の條に見えて
ゐる)。

十五は阿彌陀 病付は跡の月十二
日、むむ薬師如來の緣日、十五は阿
彌陀と、懷中の書籍繰ひるげ(女殺)

釋尊は二月十五日に入滅された。十五日は釋
尊の忌日であつて佛誕の日といひ、阿彌陀の
緣日である。黒川道祐編「日次紀事」延寶年中

成二月十五日の條に、「佛誕日。洛内外諸寺
院揭泡製法、各修法事」。風流曲三味線(寶
永七年刊)卷三、八百兩が夜ぬけ委曲の條に「今
宵は十月十五日願くは佛誕の日死にたや」。

*じふさいにん 我ながら十さい人、
今までもそなたに恥ぢ止めう止め
うと思ひしが(重井簡)

「十罪人」十惡(その條を見よ)の罪を犯し
た人。

十三東三伏 十三東みつづせ暫しか
ためてびやうと射る(加増賢哉)

東は手の握、即ち指四つ伏の幅である。三伏
は指三本並べた幅。普通矢の長さは十三東な
れば十三東三伏の矢は餘程大きな矢である。

じふし 十しも過ぎてこれぞこの、
小川通りは三途の川(大經師)

「十死」舊曆上の語。大雜書(寛永十一年刊)
に「十」とは大隱なり、わろし。この文
は、大經師に據る舊上の語を用ゐて文飾し
た祭文である。

十四經 公時が細工按摩十四經、ち
つと痛いは堪忍せいと、首ぐつ
と引抜き(關八州) 素問靈樞・十四
經(冷泉館)

漢方醫學では、人體内の筋肉のみち十四ある
といふ。和漢三才圖會卷十一、經絡部に「手
有三陰三陽、足有三陰三陽、共調之十二
經、任脈、督脈共爲三十四經、——共合六百六
十六。源氏冷泉館にある十四經は、許昌喬伯
仁撰述の漢方醫書をいうたのである。また元
澄撰述の十四經絡發揮は三卷あつて、享保
元年の我が版本もある。

じふじふ 九識の窓の前、十乘の
床のほとり、瑜伽の法水をたたへ
て(天神記)

「十乘天台の十乘觀法である。即ち(1)觀不思
礙境、(2)眞正善喜攝心、(3)善巧安忍、(4)破法
編、(5)隨道觀、(6)道品觀、(7)對治助聞、(8)
知位次、(9)能安忍、(10)無法愛。下根の人は十
乘を全修して漸く道場に至るを得るのである。
この十乘觀法は吾等が心の安住すべき所
であるにより、これを床に喻へて「十乘の床」
と云ふ。「くしき」のまじをも見よ。

じふしん 十神降魔の力を合せ、二
天四元の勇をかるると、此縛めな
何とせん(唐船歌) 十神力をあらは
せば一日も百千歳、迷ひの衆生は
以如平日(百日賢哉)

「十神」(1)吐舌相、(2)通身毛孔放光照十方、
(3)驚駭、(4)彈指、(5)地六種動、(6)普見大會、
空中唱聲、(8)南無觀世音、(9)遍散諸物聖藥
而來、10)十方通同、以上の十神力を云ふ。

*じふせんものくらゐ 我十善の位に
即かは名虎を攝政關白(并簡) 誠に
朕が第四の宮と生れ十善の位なも
しるべき身が(彈丸)

「十善の位」天子の位。十惡その條を見よと
犯さぬ者が天子に生れるといふより、十善
を天子の意に云ふ。

じふちのぼさつ 十地の菩薩五百羅
漢(神遊)

「十地の菩薩」十地の階位にある菩薩。無明の
迷闇を斷じて眞如を證するに、敬喜地、離垢
地、發光地、燦慧地、離勝地、現前地、遠行
地、不動地、善慧地、法雲地の十階がある、
これを十地と云ふ。

じふてふ 十帖の名所まで申せば源
氏物語枕草紙に似たれども(兼好)

「十帖」源氏物語の標題、推本、總角、早蔭、
宿木、東風、浮母、鸚鵡、手習、夢浮橋の十
巻を合せて宇治十帖と云ふ。

進んで、十人斬をしたこと、曾我物語などに見えてゐる。この文は、女敵討の有様が恰も十番所の修羅場に似てゐれば、かく云うたのである。

十枚乗の附紙臺 若黨三人挾箱對の奴草履取、十枚乗の附紙臺、足打早め敵の門、物まうと言ふも訛澤(堀川波鼓)

銀十枚と書いた包紙を糊で臺に貼附けたもの。貞丈雜記卷九、進物類の部に、「今時附臺」として黄金一枚、銀十枚などと書きたる包紙を臺に糊にて貼附けて、金銀をば別けに包みて遺す事あり、古は附臺と云ふ事なし、要脚何正として鳥目にて遺しけるなり、殿中に鳥目など懸御目事はなかりし也、附臺と云ふ物後世し出たる物なり、根林子作、薩摩歌に、「大鯛、昆布、柳梅、五色の縮緬、紅直綿、附紙臺、三荷に擔はせしとも見えてゐる。

*じふめん 無念無念もじふ面ばかり一言の返答もなく(川中島) 貞は肘張りじふめんつく(二枚繪) 徳兵衛不義ぢやと早まるきほひ、顔はじふ面ぐめんもいらす、羽織ひらりとやつやつ(丹波與作)

*じふもん 昨日も東の横堀で男と女子と喧嘩して、濱納屋の下で組んづ轉んづして居たをいくばな見て來た、扱になりしやら錢をついたも慥に見た、大坂の喧嘩は大方相場が極つて十文では事が済む(歌念佛) 忠兵衛はとぼとぼと、外の工面内の首尾、心は蜘蛛かくな

わや十文色、出て來るは、南無三寶日が暮るると足を空に立歸り(冥途飛脚)

「十文」總縁(その條を見よ)即ち辻君を買うて藥しお料金である。十文色とは、往來の男を見かけて袖を引き、十文にて金を賣る女の義であつて總縁を云ふ。好色一代女(貞享三年刊)卷之六、夜終符號の條に、「在郷人には艶ある若衆、然も可愛らしき風俗して女房珍しさに、同じ里の野太と連れ出て出でしが、彼男あれこれ利を以て、定まりの十文にて格別の細出しあり、と言ふを其間を待兼ねて、其は此子が好きだと、我にむつて細なし舟に引込まれ、目どりの浪沈歌の首尾。好色訓蒙圖(貞享三年刊)に十文色のことを記して、「喜になつては顔白く彩色き、折わけにひらもとゆひ、紅赤くぬり、氣色には黒い帯紺の布子には鼠帯に白襟、これも錢でかり物なり」と見えてゐる。當世婦氣(享保二年刊)五之卷に總縁のことを記して、「往來の袖をひかへて十文づつに情の切實」と見えてゐる。五十年忌歌念佛のこの文意は、土百姓の野天だけに、總縁の理實行爲を目撃して、男女が喧嘩してゐるものと察したのである。冥途飛脚のこの文は、蜘蛛かくな、十文字といふ劍法上の語を、十文色にひかへたのである。

*じふもんじ 手先の供道具、素槍片錄十文字(堀川波鼓) あれ北から十文字の道具(夕霧)

「十文字」十縦横に交又して十字形をしてゐる。根林子作、薩摩歌に、「十文字は對馬の縣とあるは、對馬縣郡府中(今の嚴原)の城主、宗對馬守義方の總標(畫)を見よ。」

じふもんじ 十文字は隼人の薩男の便きやとて、船漕廻る島津の紋(五人兄弟)



【じんもふじ】

じふもんじ 十文字は隼人の薩男の便きやとて、船漕廻る島津の紋(五人兄弟)

じふもんじ 十文字は隼人の薩男の便きやとて、船漕廻る島津の紋(五人兄弟)

*じふや 此中おれが愛き苦勞、盆と正月その上に十夜・おはらひ・煤掃を一度にするとも斯うはあるまい(曾根崎) 同じ死ぬる道にも十夜の内に死んだ者は、佛になるといひますが定か(天網島)

十夜十夜念佛の略。毎十夜とも云ふ。淨土宗にて行ふ佛事であつて、舊曆十月六日から同十五日まで十夜の間に、別時念佛を修することと云ふ。無量壽經に、「於此修善十夜、勝於他方諸佛國、爲善千載」と。十夜念佛は淨土宗では重んぜられてゐるので、十夜の内に死んだ者は「佛になる」といふ謠までも出来たのである。離波經(延寶八年刊)第六に「十夜始」十月七日。今日より十五日まで寺町の淨土宗の諸寺に於て該念佛等あり、されば無量壽經に千日十夜の語あり、これにものとせけるも也、また鼓音經にも本文ありとぞ」と見えてゐる。

じふやのこんやう あれあの繪馬は澁谷の金王が長田の庄司をなきめた體(兼好法師)

「澁谷金王」源經國の家來である。義朝に従つて尾張國智多郡長田の庄司をたたり身を害せられた。然るに庄司は平家忠實の恩賞にあつたと思つて、義朝の入洛中を襲つて之を殺した。金王乃ち長田の兵と力敵し、敵の馬を奪つて、假作人名部(こんやう)なるを見よ。

じふらせつ 恐しや三十番神十羅刹守護し給へば、力なく只今は立去るなり(大覺)

「十羅刹」法華經、陀羅尼品に、「爾時十羅刹女等、一名藍婆、二名藍婆藍、三名藍婆藍、四名藍婆藍、五名藍婆藍、六名藍婆藍、七名藍婆藍、八名藍婆藍、九名藍婆藍、十名藍婆藍、生精氣、十羅刹女、與三鬼子母并其子及眷屬、俱詣佛所」と見えてゐる。十羅刹は法華已前には惡鬼であつたが、法華以後には法華の持者を擁護して、佛所護念一如する故に善鬼となつた。

じふわがしら 十王頭の臆當を、閻魔の廳に歩み行く道のしるべと入立ちたり(三國志) 十王頭に筋金入れたる脚絆(弘敷殿)

「十王頭」閻魔の立廻りの稱。新井君美撰、本朝軍器考卷九に、「古に大立、靈應堂といひし物今も猶其制殘りたり、銀の脚絆など云ひし此物を白銀にて飾れるなるを、騎馬の時此制残に勝れしものなるを、今此制に倣ひて其形小しきなるあり、毘沙門靈應堂といふ其立廻の所を十王頭など云ふ」

部律中から要文を抄出し、四度これを監修し
大律本であつて六十巻ある。

しへ 銅の煤煙では細眉作り、しへ
の切は瘡癩の妙薬、水無き井戸は
梯子の入物(博多)

「わらしべ」(巻)の略。稻妻の心。歌集書古
寫本で、奥に「天正五年書」とあるに「素
本ハカシラノイタキキ孫ミ治シ婦人頭痛ニ殊
ニ妙也」と見えてゐる。現今でも老人などが
瘡癩のきれる時に、疊の裏などを捲つて額に
貼付けると癒るとて之を行ふ者がある。

しへんはちおん 弓矢の道は盡きせ
じと、四べん八おん讀む如く、世
に面白き武藝の教訓(五人兄弟)

しほ 四筋の町の軒深く、燈火星の
如くにて、三五以上の月の顔、さす
汐影のわけもよき、局局の手拭は
濡れぬ隙こそなかりけれ(露門松)

「汐」動銀(百人女部品定所載西川結信意)

三女の見
世女郎の
稱。動銀
一女の遊
女を月と
云ひ、二
女の者を
影と云
ひ、三女
の者を汐
と云ふわ
けは、露
曲・松風
に「月は
一つ・影



〔ちわく〕〔げか〕

は二つ・みつ汐の上あるより出たと云ふ。好
色大鑑(元祿五年刊)大阪新町由來の條に「鹽
といふは三汐、陰といふは成夜、月といふは
一汐、わけと云ふは五分、此封丁付は松風の
語より出たと見えたり」。御前義經記(正
徳二年刊)に、「端女郎は鹽より下みせ女郎
といふなり、……位は(一動銀)一汐を一寸と
も月ともいふ、二(動銀)二汐は二寸とも影
ともいふ、三(動銀)三汐を三寸とも汐ともい
ひ」。露門松のこの文は、愛想をしほ(次
條を見よ)と云へばその意をいひかけたの
である。「さんもんめ」を見よ。

*しほ 善きも悪しきも空値なし、望
み次第に召されよ、目元にしほ
答ゆるにぞ(烏帽子折) 尼が崎としほ
こぼれる丹波興作 尼が崎としほが
海近く、なぜにそなたはしほがな
い(歌念佛) 御身が小萩を見るたび
に目を細めて訝しい目付が氣に入
らぬ、四五十に餘つてしほの目
の時分かえの(小栗判官)

*しほ 笑ひをしほに言ひしらけ反
魂香 お梅がこゝへ出るならばそ
れをしほに相睦して(萬年草) 此度
畠山の重忠東大寺再興の奉行に上
るを好きしほと、まづ重忠を狙は
ん爲(出世景清) しほや又鹿相御免
御免といふをしほ、三人ぐつぐつ
起上り(寄庚申) しほあひよきぞ乗
取れ(用明天皇)

機會。折。和訓栞に「物のほどよき時節をし
ほといふも、潮の指引より出たるなるべし」

月のでしほ入しは、稻のかりしほ、などは
也。「しほ」合とは時分。程合。

*しほがまさくら 彼岸櫻の雪と散
れ煙となれや鹽釜櫻、汝に恨八重
一重(升筒)

〔鹽釜櫻〕俳諧時記草春三月の部に、「鹽
釜櫻。この花至つて艶色あり、其樹葉殊にう
るはし。松岡安選櫻、櫻品に「鹽釜櫻」重
なりて花と葉と離り出るなり、小輪にして花形
しほみたる如し、花頭に皺ある故しほみたる
やうに見え、牡丹の還山といふものに同じ、
花少し垂るる也、葉は小さし、はまよきと
いふ義に就く。

*しほくび 上段に突く汐首もと右
手を伸べてしつかと取れば(川中島)
〔汐首〕槍の穂先の柄に接した所。錦文流鏑
傾城八花形に「一つの穂先叔母御前の助骨下
にぐさ」と立ち、しほくび越して裏がけは、
しほごしのまつ 西行法師が汐越の
松(反魂香)

〔汐越松〕越前國坂井郡濱坂の岬を汐越とい
ふ、その處にある松。西行法師の歌に「夜も
すがら嵐に涙をはこはせて、月をたれたる汐
ごしの松」。

しほさつ 三寶四菩薩目蓮の御
影(大庵)
〔四菩薩〕上行・無邊行・淨行・安立行の四菩薩。
しほじり
「なほはしほじりのやうになん」を見よ。
しほちや 鹽茶を飲んで寐てくれ
う(旋盤)
〔鹽茶〕番茶に鹽を少し加へて點てたものをい
ひ、鹽を醒す效がある。
*しほて 尾筒を左手にから巻けば、
下女はしほてをかい掴み(會稽山)

〔鹽茶〕番茶に鹽を少し加へて點てたものをい
ひ、鹽を醒す效がある。
*しほて 尾筒を左手にから巻けば、
下女はしほてをかい掴み(會稽山)

鹽の長次郎 手をかゝ振上げ投げる
額で鹽の長次郎、錢は手にとまつ
た(重升筒)

元祿頃に於ける手品師である。西鶴置土産
元祿六年刊巻五に「松風琴の丞年十七人形
よくつか申候、此ほか口から水を吹いたし、
壁に文字を寫し申候、品玉鹽の長次郎まさり
に候」。還紙料上に「鹽屋長次郎は放下師
にて、太刀かたは更なり、牛馬をさへ吞む
眼くらましに長たり、難波にて大に流行はれ、
元祿の頃江戸に下り、もと鹽屋九郎右衛門
座の歌舞伎者とも、亦鹽を面白し者ともいへ
り。此人の手品は江戸でも名高かつたもの
で、江戸版の曉庵無僧(元祿九年刊)巻之二に
も「振袖の中へ何やら入れたる手づま、しほ
や長次も及がた」と見えたり。

潮干の珠 神功皇后と申すみかど、
新羅退治の御時潮干の珠・潮満つ
珠をもつて御船を守護し(國性師)
彦火火出見尊が海神から貰はれた神寶であ
る。日本書紀神代卷に「復授潮満還及潮満
還、而詠之曰、濱潮満還、者則潮満還、以此
還三福汝見、若兄能而祈者、還濱潮満還則潮
自満、以此救之。山口縣豐浦郡の海上にあ
る満珠干珠の二小島に就いて傳説に「神功皇
后が三歳を征し給ふ爲に豊浦に向はれた時如
意珠を得られ、河童農良が水中より出現して
干潮珠・満潮珠の秘法を授け奉つた。(この二
珠は彦火火出見命の得させ給うたものと同一

一七七

物であらう。御肌後滿珠島千珠島に納め給うたといふ。

潮満つ珠 「しほひるたま」を見よ。

*しほらし やあ餓鬼も人数、しほらしい事ほざいたり(國性爺) 唐猫が雄猫呼ぶとて薄化粧するはしほらしや(大經師)

やさしらしい。柔和らしい。愛らしい。貝原好古編「語釋」に「俗に人のみやびやかなるをしほらしといふ、みにくいやしきをぶしほ」と云ふ、居家必備寶、常談云、女人醜陋謂之無鹽……劉向新序云、齊有婦人、極醜無鹽、號曰無鹽女……是故事に據て日本にも無鹽、隠らしなど云俗語あるにや」と見えてゐる。

按じると、「しほらしはもと」としほらしの假名なるべく「しをる」「しをらし」などいふ語は、婉曲意で、折れ曲る、なよ／＼と弱々しうの意より轉じて、やさしう、愛らしいの意にもいふのである。

しほんかかり 四本かかりの枝垂れて(特統天皇)

〔四本懸〕「かかり」を見よ。

しま お厄は我等拾ひ除け四魔三障崇りばなし(童女) 惡魔天魔邪魔心魔四魔の首領の僧正坊、大天狗の所爲なるわと、鼻にあらばれ見えにけり(孕常盤)

〔四魔〕煩惱魔、陰魔(新譯・愛魔)、死魔、他化自在天子魔(新譯・自在天魔)。

しまいがた 梅菴御見舞四枚肩、おりの衣長羽織夕露 世にある時は四枚肩、飛鳥の如く虚空をなけり(吉野忠信)

〔四枚肩〕昇夫四人附ける廻囃。

しまじゆ 彼處の桔梗染の腰變し

まじゆの帯、しやぢやわいの(女殺)

〔まじゆ〕編綴子の略。

*また 島田亂れてばらはばら、顔にばいつかばんげしやう(大經師)

〔島田〕しめたわ(緊手輪)の轉訛であらう。島田亂のこゝ。遊遊笑言に、「この曲は古く童子の髪を結するに似て古書に多し、よより思ふにしめ手輪の轉訛なるべし。しめは髪なり、たわは髪を曲るをいへり。」(島田の名稱は、駿河國島田縣の遊女の髪を風から起つたと云ひ、或は島田甚吉といふ俳優が結びはじめたからいひ出た名だとの説もある。

*しまひだいこ 仕舞太鼓の音までも寂滅爲樂と響くなり(分露)

〔仕舞太鼓〕三番太鼓とも云ふ。その條を見よ。

*しまわうこん 一文不通の衆生まで千手の御手の摘取り、紫磨黄金の御肌、忽ち那智の觀世音(安勢)

〔紫磨黄金〕黄金箔を光線に透せば紫色に見えるによつて、黄金の精なるものに云ふ。この文は、舊家文盲の者までも皆喜したによつて、觀世音は忽ち紫磨黄金の福満た身になつたといふ意であつて「忽ち」は「那智」と同韻語によつて云ひ續け、去年那智の觀世音の開帳のあつたことをきかせた。

しみしたたるい (青庚申)

しみじみとでれい

死脈 二人に死脈が打つ(重井節)

人の將に死なうとする時脈搏意で然も微弱なるを云ふ。この文は以て譯みの絶えたる意に云うたのである。新刊勿論子俗解八十一難經(元和三年古活字版)に「一晝六至一吸六至、爲死脈也。沉細夜死、浮大晝死。百難盛衰記(正徳三年刊)一之卷に、「只今の細脈體は雀啄と申して雀のつづく様に覺え奉る、こ

れ死脈なれば參附獨參にも及ぶまじと申せは。

しめあけ 換をそつとしめあけに後

に立つても(龜山慈)

〔縮明〕昔せぬやうに明けること。人に知れぬやうに聲を立てないで泣くをしめ泣きといふ、「しめ泣きのしめもしめあけのしめも同じ語で、締め抑へる義。

しめいだいし 陶淵明が漉酒巾、四明大師の律衣を着し、儒者佛者と分き難き老居士(唐船卿)

〔四明大師〕宋の知識大師を云ふ。四明山に居て天台の正義を弘めければ四明尊者と號した。

*しめす 枕の刀おつ取つて有明しめし出でければ(松風) 第一は火の用心、螢程の火もしめせ(基盤太平記) 人人は松明しめし隠れ居る(加増曾枝)

〔無水に燃して火を消すを云ふ。轉じて、燈火などを吹消すをも云ふ。この語現今も福山市あたりにては一般に用ゐられてゐる。しめすを併せ見よ。〕

しめすまい うらが様なめら、歌・連歌にべる都人夢にも見やしめすまい(女護鳥)

〔しめすまいの轉訛。現今も鹿兒島・熊本地方に一般に用ゐられてゐる。〕見やしめすまいは「見はしめすまいの訛。

*しめなき 女房にば苦勞をさせ榮耀が餘つて色狂ひ、聞えぬ人ぢやと、しめなきに恨みくどくぞ不便なる(夕露)

めて、しほり泣に泣くこと。「しめあけの條を見よ。

しめのかみ しめの髪を搔摺み、ひらりと乗つてしづしづと歩ませ給へば(小栗判官) 三十三に捲立てしのがみ・取がみ・しめのかみ(源義經)

〔しめのかみ〕の訛。その條を見よ。

*しめのはうぐわん しめのはうぐわん(盛國・孕常盤)

〔しめのはうぐわん〕主馬の判官の詔略。主馬の首で檢非違便所を兼ねる者を云ふ。

*しめる 北向の八幡宮の燈明も、おのれとしめり行く先は、罪業の程思はれて生玉

〔無燈火・火を消えを云ふ。「しめす」を見よ。〕

じめんづく 勝二郎様の女房になる程の吾妻ぢや、じめんづくに頼むからば零もこれに偽無い(湊舞)

〔自面盡〕本人直に面すること。「盡は相談盡など云ふ盡と同じ語で、名詞に添へて或限りを盡す意を示す接尾語である。

*しもさか 銘なしの下阪、寸も焼もかはらぬ(女腹切)

〔下阪〕美濃國關孫六の家筋であつて、天正頃江州下阪郷に住んでゐた刀匠關八郎左衛門作の刀。

霜月春日の御祭 霜月春日の御祭、兎狸をかげまくも(大冠冠)

十一月二十七日から行はれる春日若宮の神事を云ふ。國花萬葉記卷三、大和國添上郡の條に「霜月の御祭と云は若宮の神事なり。崇徳帝保延二年九月十七日に初れり。其後百四代後花園院寛正中、十一月二十七日日を轉ぜられたり。凡そ祭禮の儀式退轉なく嚴重

なり、願主人龍田川の堀離獨湯の發祥、通照院のわたりなど云事有て、院より鶴屋を立つづけ、焼子一千二百五十六羽、鬼百三十四耳、狸百四十二正足の實をかけ並べ、公齊のかざり物敷菓子などつたかくもりて、現式多し。

しもつけ 紫苑・岩井に芥子、繡線菊の花桶に、枝垂櫻や糸柳(龜山姥)に自生する落葉灌木で、高さ四五尺、卵形をなし、葉は長鋸齒を有して尖り、て五生す。花は小形であつて、紅紫色または白色をなし、數多集り生じる。



の繡線花冠を [けつも]

*しもと 櫻の下枝しもと振上げ、追立てばつ立て追廻し(井筒) 枝の繁き若木立をいひ、よつてまた細き枝で作る筈、枝をいふ。和訓桑に「茂本の義なるべし」とある。

しもはた 布織るしもはた取組みて、庭木の松にもたせかけ(薩摩歌) 「下機」機に上機と下機とあつて、上機は多く細や麻を織るに用ひ、下機は木綿を織るに用ひる。日本永代蔵巻五、世渡りには涎餅のはたらきの條に「けふと明日との物前、さきもそがはしき片手に、下機に木綿一端これを織り下して」。

しやが 父に似て父に似た(雲門松) 「名乗りて過ぐる杜鵑云云」を見よ。

しや あれあれ彼處へ桔梗染の腰變り縞縞の帯、しやぢやわいの(女殺) 「著」それしやの「しや」であつて遊女をさふ。三島將貞享年四年刊「卷之二」に、彌二郎

が遊女みちのくの幻を、それとは知らないで其姿を評して「かまはぬ島田町でなし、……みすみすしやの果なり。義經本櫻第一に「祇王・祇女・佛などといふ白拍子のしやの果が、尼になつて此嵯峨に居る故に、それで所がみだらになつたとて」(それしや)をる見よ。

茶をくれたな(重井簡) 「生薑茶」といふものはない。徳兵衛が房に逢ひたいと思ふ心のせつなきに、生薑酒のことから思はす生薑茶と、口をすべらししたじどうもどきの言葉である。

*しや 搗粉木しやに構へ待つて居ります(女腹切) 「斜」ななめ。「斜に構へ」とあるは、手にせる得物を斜に構へる義、用意ありと身構へするをいひ、劍道の語を諸議にいうたのである。

しやうくわう 花に鳴く鶯は聲に笙簧の調を成し(島原莊合戦) 「笙簧」笙の笛の音。禮記に「女嬃之笙簧」。杜牧の詩句に「疎松隔水發笙簧」。

*しや 女と女の密通とは、しやそれがどうなるものぞ(三世相) しや堅い事ばかり、毒藥變じて藥となる、袴なりとも解かしやんせ(雪女) 手にも足らぬ難人ばら、しや何事かあるべき(反魂香)

正月買 正月買の大大盡、太夫様より付届け(夕暮) 正月買の騒ぎぞめ、かざりの下ではしやみ弾く、梯子のかげでは賣引分豆まき年男(壽門松) 堺の客は正月を頼まれはならぬ人、ひらに遣つて下さんせ(重井簡)

じやどちらへ似ても蛇の子孫(逆鱗) 「蛇蛇之助の略。大酒家云ふ。底抜けの上三日の句に「蛇蛇之助に下戸や馬繫桃の酒。自の豊流舞・俳諧彼岸櫻(貞享二年刊、天王寺名所の句に「蛇蛇之助こそ熱心のつて花に酒。也」) 枕草筆記上の下に「田中常矩が延寶五年二月の御吟二百箇巻頭の句「蛇蛇之助がうらみの鐘や花の暮」といふをあげて」蛇之助は今いふ底抜け上戸のことなり」と記してある。

辛氣辛氣で夜の目もろくに、しやいもなき夢の氣がかり祈らんと(島原莊合戦)

*しやう えど 常江戸・脇城・國脇まで(薩摩歌) 「常江戸」常府とも云ふ。常に江戸に居る諸侯。

しやうがざけ 生薑酒にして待ちませう(重井簡) どうせうかかうしやうが酒、慕附く様に氣がなつて(重井簡) 水へ入つてんと喘上げて、鉢巻・水鼻・誰やへん、されば候・何がしは暑や寒やの風の神、手療治の生薑酒・敗毒散に追出され(振袖始)

しやうがぢや 今も今さる方で生薑

正月買 正月買の大大盡、太夫様より付届け(夕暮) 正月買の騒ぎぞめ、かざりの下ではしやみ弾く、梯子のかげでは賣引分豆まき年男(壽門松) 堺の客は正月を頼まれはならぬ人、ひらに遣つて下さんせ(重井簡)

*しやうこん
寺僧を召され、しやう

急ニ故」。轉じて、肉食せぬことを云ふ。

しやうじやうのみだれ 常住酒で足

慶長中堺の町人大黒屋常是銀吹を命ぜられて



より銀座が始り、遂にその名聲となつた由見えてゐる。開八州駿馬のこの文に「くひ」とあるは「くひん」(極印)のことであつて、昔は「ん」を略してひひ、極めの印の義であつて、金銀貨に最目、常星などを打込んで證とした印をいふ。公時が前海老色は即ち常星の極印同然の證據。公時時代に常星の極印がある筈がない。これも近松が時代を無視し、元祿の公時である。

***じやうせつ** 親子諸共九品のじやうせつに往生す(賀古教信)
「淨利淨土。くほんのじやうせつを見よ。」

じやうぢうしせつ じやうぢうしせつを見よ。
「じやうぢうの二法は云々を見よ。」

***じやうつき** 幸ひじやうつき御命日、ただ若君の御跡を弔ひ給へ(隅田川)
「正月」祥月とも書き、正臘月の意である。人の死亡した月に當るを云ふ。死亡した毎年のその月その日を祥月命日といふ。

***しやうど** 我は狂氣したさうな、方角のわきまへなく何處なしやうどに行くことぞ(梶野) 親の意見は直なれど傍の取りなし横時雨、どこなしやうどにさして行く笠や(卯月紅葉) 下を覗けばとこやみに、何のしやうどは見えれども(大經師) 吳服の中將雪枝は堺の濱よりしやうどもなく夜半に紛れてとどとばと(天鼓)

目當。當所。古文眞寶後集(永正九年)の寫本、岩崎文庫所藏(卷一、漁夫辭に「行吟漁畔」とあつて、五山偈の註に「吟ノカタチハ判ヲ踏ヤウニシヤウドモナイ體歟」と見えてゐる。

按じると「じやうど」は「せうど」で「せんど」(先達の音便であつて、紺屋を「こや」といふの類であらう。そして、進み行く先といふ意から、當所の意にもなつたのであらう。
***しやうとく** 六十八で生得堅氣(錦標三) 表の乗業小町屋惣七生得(生得うまれつき。本朝佳話(貞原古編)に、「俱舎論云、人唯無生得。生得とはうまれつきといふ事なり」)

しやうなえのしやうなわしめ 大磯の虎と申す流れの女 現世こそは苦あらめ未來はせめて、しやうなえのしやうなわしめと思召し、お袈裟に召され罪を助けてたび給へ(五人兄弟)

「商那衣の商那和修」しやうなは商那、舍那、奢那、向那など音寫し、麻に類する草の名である。「商那衣」は商那と云ふ草の皮で作つた衣であつて、麻衣と譯してある。阿毘曇經・下に「奢那衣者、奢那樹似麻、取皮以爲經」に「商那和修」は阿羅漢の名で阿難の弟子である。常に商那衣を着てゐたからこの名がある。付法藏傳二に「向那和修、由三顯力故、處母胎著商那衣」。(この阿羅漢は阿難から法を受けて優婆塞多に傳へた。正法眼藏・婆娑功徳卷に「商那和修尊者 第三付法藏」と見えてゐる。)

***しやうね** これは如何なる性根だと、聲を上げて泣きけれども(二枚繪) 正念の床に坐し淨土の道を踏分けて(孕當盤)

「性根」の字を當てれども、もと正念から出た語であらう。「正念は、信心を發得して失はないことを云ひ、八正道中の一である。性根は「こんじやう」根性の意に云ふ。

正八幡大菩薩 (鎌田・堀川波鼓)
公事根源に「八幡大菩薩と申御名は、御託宣に得道來、不動法性、示三八正道、垂權運、皆得解脱苦業生、故號八幡大菩薩」と見え、安齋隨筆に「古き軍談の册子等に、武士の誓語に正八幡宮を照應あれといふ語あり、八幡の本地は阿彌陀なり」と八幡大菩薩と號するに依りて、神と佛と交り給はるはき故本をとりて正眞の正八幡大神宮といふ意なるべし」と見えてゐる。蓋し正八幡の正は、安齋隨筆の説のやうなるわけによつて附いたのあらうが、後には正八幡まで神佛混合説にひかれて、正八幡大菩薩と云ふやうになつたのである。

***じやうはりのかがみ** 偕又大地の底に入るとも、一面八丈の淨玻璃の鏡に影の立添ふ如くに(用明天皇)
「淨玻璃鏡玻璃は梵語のdārika、水晶を云ふ。水晶の純潔透明なるものを淨玻璃といひ、これで作つた鏡を淨玻璃の鏡といひ、閻魔の廳にあつて、死者が前世で犯した善惡の業報を映出す」と云ふ。詳しくは十五經を見よ。

じやうびん この禿と申すは、じやうびん大王の御子しち札太子と申せしが(騷物遊)
常實に、釋尊の父淨飯大王(梵名 Sudhio-dhana Raja)をいひかけたのである。

葛蒲刀 つらや端午の紙幘、神にも世にも捨てられて、葛蒲刀の切先にかゝる契りの惡縁と(生玉) 軒の葛蒲のさしもげに、千千の病はよくれども、過去の業病通れえぬ、葛蒲刀に置く露の、魂も亂れて息絶えたり(女殺)

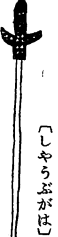
「葛蒲刀」端午の節句に柳木を以て刀の形を作り、これに箔を塗つて腰に佩びた、これを葛蒲刀と云ふた。井原西鶴實・駒形用卷一、間屋の寛間女の條に、「葛蒲刀の箔の色變り、日次紀事(延寶年中戊五月丁・端午の條に、「以柳木作大小刀、是謂葛蒲刀、男兒預之於腰」云云。この文は、折しも端午の節であるによつて、臨差を葛蒲刀にひなしたのである。)

葛蒲草の角十文字 葛蒲草の角十文字・白頭の犬、これ越前家(薩摩)の槍標。(越前福井城主松平兵部大輔昌明の槍標。)

しやうぶついちによ 今この宗生佛一如の道理をも明さす(大原問答)
「生佛一如生は衆生、佛は佛陀である。生滅ある衆生と常住なる佛陀とは別物のやうなれども、本有の理體より觀れば、二者同一であつて別異なるものである。これを生佛一如と云ふ。

しやうぶづくり 三條小橋の下細工、葛蒲作の拵も五月からの詠、何として出来ぬぞ(女腹切)
「葛蒲作」武家名目抄力御部十七に「詠道の橋手の筋なきを葛蒲作と云ふ、太平記に備前長刀の筋なきを葛蒲作なるを因幡登喜全村が持たることも見えて、筋なきがとては筋なきの方を普通よりは導らる、又の方とひとしく落したることにて、其様の葛蒲の葉に似たるが故に葛蒲の名をおせしなり」と見ゆ。果林子のこの文は「三條小橋に三條小鍛冶有名な刀工」をきかせ、童謡の橋の下葛蒲は折れども折られず、刈れども刈られず云云を應用して「橋の下細工葛蒲作」といひつけた。

***じやうぶつとくだつ** 母が苦念を



通れ成佛得脱疑なし(經山慧) 互に

修羅のきつなを離れ、成佛得脱の

身となれと(井筒)

「成佛得脱」成佛とは衆生が菩提心を發起し修

行して、迷妄を斷じ眞理を悟つて、佛果菩提

を成就するを云ふ。成佛すれば身心の繫縛苦

患を脱するが故に成佛得脱といふ。龍曲(藤

戸)に「かの岸に到りて成佛得脱の身とな

りぬ」。

童甫の冠 童甫の冠・花紋の杏(國性

節) 童甫の冠を杏に履かれんより

首陽山に蘇餅を練り(雪女) 錦の

袂・綾の杏・童甫の冠・石の帯(天羅冠)

緇布の冠であつて儒者などの冠つたもの、股

の世に童甫と名づけた。童は明である、丈夫

を表明する所以なれば童甫と云ふ。禮記(儒

行篇)に「孔子曰、丘長居宋、冠童甫之冠」。

莊子に「宋人資(童甫)而遊諸越」越人鬻嬰

文身、無所用之」。

*じゃうぼん それから直に奥の所

の上品上生に誘はれ参らせ(一心二

河白蓮) 西方淨土に一文字、越り

るは下品下用櫃、忽ち上品膳棚に

到らんと(卯月潤色)

「上品」くほんのじゃうせつを見よ。

せ(生玉)

「普度屋徳兵衛」曾崎心中に見え人物であ

る。假作人名部「とくびやうあ」を見よ。

*じやうらう 若い上臈のおやさし

い、年寄と思召し嫁子もならぬ介

抱(冥途飛脚)

「上臈」貴人を云ふ。「若い」年寄の義で、僧侶

が安居の功を積んだ年を數へる語であつたの

が、釋じて男女ともに階級の名となり、上臈、

中臈下臈などといふ。

*じやうらうがじやう 日參の焼香雲

に棚引き、しるしの松の夕嵐じや

うらくがじやうの聲あれど、昔の

夢をや破るらん今川了俊 常樂我淨

の風吹けば、微妙妙音玲瓏と妙法

の法を説く大層開答 谷には常樂我

淨の川波に架れる橋は西東(釋迦)

「常樂我淨」法性眞如界は寂靜常住にして何等

の苦がない、故に常樂と云ふ。法性眞如の理

を證すれば、自在無礙清淨無垢なるを得るが

故にこれを淨と云ふ。「常樂我淨」の聲は極

樂淨土の聲である。「常樂我淨」の川波は極樂淨

土に打つ川波である。

太子) 若し青馬の腹へなど生れて

は行かれぬか、但釋迦になられた

か(龍眼天皇)

「釋迦」うんすんかたるうんすんを見よに

於て、青の札の内の第十の札の一枚に法師の

形を畫いてあつた、これを釋迦の繪札と云う

。雍州府志「貞享三年刊」土庭門下「服器部

に「凡賀賀多有四種紋、……第十畫法師之

形、一畫、僧形者也。江島其族撰・商人重臣

團一之巻、貧苦を切替へる僧牌の繪畫の條

に「長者殿の隣に、一寸外へ出す打込んで僧

牌の繪を畫き、一から十迄年中是で女夫が口

を過きぬ、不斷書いて居る釋迦の十は百もの

と聞けり云云」。永田貞竹篇「狂歌机の座(享

保二十年刊)に「かねはりてかるたの釋迦の

教にはあざ萬法や一如なるらん」。釋迦牟尼

佛「釋迦になられたか」とあるは、釋尊また

佛の意に骨牌の釋迦札をきかせたのである。

「かるたのあつた云云」を見よ。

しゃが 長う添へとや副下に、まく

らかり葉のしやがはれよげのあい

し(聖徳太子)

「蝴蝶花」草の名。高さ一尺餘に達し、葉は卵状をなし、花は細き花梗を有し、花被は紫色を帯び、花冠は黄色である。



であつて、その形遠くから見れば大蛇に似てゐるよりの名。

*しゃかつらりゆうあう 殊更當社

の御神はしゃかつら龍王の第三の

姫宮にて、海上を愛で給ひこの嚴

島に足をは垂れ衆生を濟度まします

なり(百合舎)

「婆娑羅龍王」婆娑羅は梵語のあらはである。

龍海と譯し、八大龍王の一で、海に棲息して

ゐる。長門本「平家物語」に「嚴島明神と申す

はしゃかつら龍王の第三の姫宮云云」。龍曲

白樂天に「安藏の嚴島の明神は婆娑羅龍王の

第三の姫宮にて、海上に浮んで海青龍を舞ひ

給へに云云」。

しゃかにひ 腰のつがひを水車、

水は手負の禁物と知らず、手向の南

無阿彌陀佛 釋迦擔して通りしは、

現世の恥辱はよしやよし(扇八景)

子ばありながらその甲斐なく、無

縁の手にかからうより、いつそ行

倒れのしやかになひがましでおち

やるわと(女教)

「釋迦擔死人を納めたるを、後向に背負ふこと。元祿・享保は、町内に行倒れ人ある時は町奉行之を搬屍し、その死人の在所も親族の者も知れぬ時は、その處に行倒れ人の人相などを記した札を建て置き、非人に命じて死骸を取付けさせる。非人即ち死體を棺に納め、後向に背負うて埋葬地に運んだことは、元祿・享保頃の古代法・行倒人取扱ひをいへる條に記されてゐる。釋迦擔とは、佛を擔ぶの義である。現今加賀あたりで、小兒を後向に背負ふことを佛ぶんぶといふ、ぶんぶは背負ふことをいふ。

しゃかもんぶつ 西天の釋迦文佛

は、五穀を棄てたる罪業は五逆に
まさると説きしとかや 天智天皇
「釋迦牟尼佛」の語。

＊しやく 亞相笏取直し(女夫池) 金

づくめなる身の榮華、金の冠を着
ねばかり、しやくは持病にありと
かや(酒吞童子)

「笏」の書(二)「骨の音と相通へば」を思ひ
て、その長一尺許なるより「しやく」とい
ふ。朝臣神官等が正殿した時は必ず持つもの
で、木笏・牙笏等がある。天皇の上はを一文
字にし、臣下のは角を取りて四角とする。儀
式などをその裏面に貼りにて備忘とするこ
がある。衣服令に「一品以下五位以上牙笏
六位以下初位以上木笏。和名抄に「笏俗云尺
手板長一尺六寸、闊三寸、厚五分也。」「し
やくは持病」とあるは、金の冠の縁より笏と云
ひ、額をいかけたのである。この文は唐
推遷軍卷五に、「或時天木屋幸齋が著に越過
し、公の側給を襲りし後、餘事に托し、例の
戲文を作れり。芝居主竹田小出雲狂言の筋を
思ひつて、門左衛門事をとる、種積以實先
生もその席に居られしに、段段作文するうち、
金冠の冠きぬばかりと書きさして筆をやめ、夜
も深更に及びぬ、明日の事と、門左衛門は歸
れり、跡に以實子と小出雲一つ敵衛にして
話に、探搜門左が例の妙女驚きしなり、併し
金の冠きぬばかりとは、町人の事蹟に狂言筋
語ながら甚だしきに過ぎたり、明日書き直さ
せ候べしと、小出雲申しけるに、以實子のい
へば、いかさまけやけ言葉なり、定めて
門左了簡あるべしと察られける、翌日門左衛
門来りて、よべのあとを暮かんと、金の冠き
ぬばかり、額を持病にありとかやと續けられ
ば、兩人は慨然たりしかや」とあつて、有
名な文である。

じやくくわん 此君弱冠の昔より軍

しやくくわん—しやちらんぼう

術銀術妙ありて、士卒をなづけ給
ふ事(天廣庵)
「弱冠」二十歳をいふ。禮記・曲禮に、「人生十
年曰幼穉、二十曰弱冠。」

しやくじやうじゆげ

しやくせんだん むむそれで聞え
た、嘉平次のしやくせんだんと打
笑ひ(生玉) 好色修行と心ざし通ひ
詰めた其舉句が、それはいいいし
やくせんだんの阿彌陀佛まで質屋
へ飛し(安福)

「赤梅」を「借槿」をいひかけたのである。
赤梅は梅樺木(せんだん)を見との赤色を
帯びたものをいひ、香木である。生玉心中の
二の文にのこしては、「さかのしやく」を「びし
ゆかつま」を見よ。
しやくくわん 死骸の両眼を抉り出
し石南花の葉に包み(戀物語)
「石南花」石南科属の灌木で、葉は楕圓形で、
初夏の頃淡紅色の花が枝頭に横簇する。我國各
地の深山に自生し、觀賞用として栽培す。
しやくくわん 「しやくくわん」を見よ。
＊しやくる 治兵衛様早う出たいと
氣をせければ、せく程廻る車戸の、明
くるを人や聞き付けたと、しやく
つて明くればしやくくつて響き、耳
に轟く胸の内(天網島) 浦曲の聲に馴
れたる女、波も漢屑も事ともせず、
引き留めぬと、しやくり引く(浦島)
「せきむの義、激するをいふ。現今も中國
地方(福山市等の地方)では、戸などたやす
く明かないのをいまだ激して引くを、しやく
くる又はしやくくつて引くといひ、失聲をし
やくり聲ともいふ。

＊しやくわん 裴文籍大辟上げ、やあ
愚なり時平、菅丞相は唐朝へ從ひ
我が國の味方なり、しやくわんど
も時平を討取り(天神記) 李膺天
り韃靼王へ獻上の爲持出したる虎
なるぞ、早瀬渡せ、異議に及ばば
打殺さん、しやくわんしやくわん
と喚きける(國性爺) 諸侯大夫數な
らぬしやくわんども、劍詔へに來
ては何時何日に屹度出來せ、念を
入れよ、氣に入られば受取らぬな
どと(唐船歌)

「おにしやくわん」の「おに」を取除けたもの
で、即ち「じやくくわん」上旨の變じた語で
あつて、軍士といふ程の意に用ゐたのであ
る。なほ委しくは「おにしやくわん」の條につ
いて見よ。(難波土庫 卷四に「しやくはんは
射官なるべし」とあれど、射官といふものは
日本にも支那にもない。或は「冠者」を倒さ
にかく云うたのであらう、などの説あるれ
ど、總ていかにが。
じやくじやうま 「ぢやくじやうま」を見よ。
しやくじやうり
「味もしやくじやうりも云云を見よ。
＊しやくよく 宗廟社稷の大小の神
祇王法を守護し給ふ故(女楠)
「社稷國家の意。」「社は土の神、」「稷は穀の
神である。土・穀の神は何れの國でも祀れる
によつて、社稷を以て國家の意にいふ。孝經
に「保其社稷、而和其民人」。
しやくする 御弟子二人に灑水させ壇
に上らせ給ひければ(總持天皇)
「灑水灑言の修法に、香水を壇上に灑ぐ法で

あつて、即ち加持香水である。
軍聖利明王の咒、誦して香水を
加持し、散枝を以て灑水器の
香水を撈き清めて、壇上の供
具及び道場内に灑ぐ。

＊しやくばりかへる

沙汰あるまで何奴も
動くなと、血塗れの劔
提げしやくばりかへ
つて歸りけり(唐船歌)
「鱗張反鱗のやうに反身
になる。



〔杖散と器灑水〕

しやくちらこはい さぞ真黒なしやち
らこはい肌へ、おおむくつけやう
るさや(日本武尊) これが何の藤袴、
しやくちらこはい皮袴と、どつと笑
ひのどやくや粉れ(反魂香)
「鱗張り確い。」「しやくちらこ」に就いては次條
を見よ。
しやくちらんぼう 且那の掛も何も
彼もしやくちらんぼう、近付中に
痛手を負せ動かぬ身になりし
故、ちと借錢を輕めん爲あぢな商
ひからくんで(永明日)
やたらむちやくくわん。合類大節用集 享保
二年刊 氣形門に「魚虎。頭如虎皮如狷有
二刺、若人如蛇咬。老則變爲鯨魚」と見え、
同書生植門に「羅王。如掌色翠綠上多
米點子、葉生衣上。稱為奇樹」と見え、猫耳
(享保十四年刊)に「櫛石の毬文に「列居椿の言
の葉しげり、羅王樹のむづかし編纂の姿
なれば」と見えである。これらの語から考へ
れば、「さちら」も「しやくちら」も「さつぽう」も
「さつぽう」も、皆刺多く手のつけやうがない

意から附いた名で、「しやちらさんぼう」も、手のつけやうがなくやたら意である。

***しやてい** 抑先日御舍弟豫州判官殿を討ち進するに於ては(源義經)

〔舍弟〕家弟。辭源に「舍弟」對人自稱其弟也。魏文帝與鍾大理書、是以舍弟于建因、荀仲茂時從容、噲、諱、宋司馬光書儀答人、題問狀云、兄曰家兄、弟曰舍弟。

***しやなしや** それをしろべといひ捨てて、しやなしやなふりてぞ歸りける(戀) 小棲かいてり屈んだ腰をむりやりに、しやなしやならと行くふりは(井筒) もとの女でしやなしやならと立歸る(薩摩歌) 安居・生玉清水坂をしやなしやならしやならしやならしやならしや

よこちよこ走り(生玉) 「しやならしやなら」とも云ふ。しやなかな歩振を云ふ。すなからすな。狂言・釣狐(大藏流)に「我が古塚へしやならしやなら」と。

***じやのめ** 鐵按摩灸庵洗物師の蛇の目後家(眞庭野合歌)

〔蛇目〕蛇の目のやうな怪真な目付を云ふ。伊賀越道中双六(御宿)新聞の段に「この海道を住家とする蛇の目の眼八」とある蛇の目の怪真な目付であるによつて渾名としたのである。

***しやば** げにや安樂世界より今この娑婆に示現して(曾根崎)

〔娑婆〕梵語 Saha 娑婆または忍土と譯し、現世を云ふ。續譯名義集に「悲華經云、何名娑婆、是諸衆生、忍受三毒及諸煩惱、能忍三斯忍、故名忍土」。げにや安樂世界より云云」を見よ。

しやばくぢうぢうしやのほさつ

〔彌迦〕 娑婆久住恒娑婆(娑婆は現世を云ふ。恒沙)は恒河沙の時で、恒河の沙の無數無限のことをいふ。娑婆に久しく住せる無數無限の善隣。

***しやばふさげ** おのれ侍ならばなど主の敵長田は討たぬ、五穀つふしの娑婆塞げ(烏帽子折) 樂しみもない浮世の中、兄めが常常娑婆塞げとめかすも道理、死んでのけうと(天神記)

〔娑婆塞無益に生き長らへて世の中の邪魔者。殺しと云ふの類である。〕

***しやみ** 何の道にも稽古あり、沙彌から長老になる者なし(吉岡染)

沙彌が聞けば長老が聞く(薩摩歌) 〔沙彌梵語 Śramaṇa 息養と譯し、安息して慈悲の地に居る義である。始めて落飾して佛法に入る者の稱。〕

しやむ 鶏は唐丸しやむ・かしはちやば・小こく・色色の(本領曾我)

〔通雅〕開篇である。鶏。嬉遊笑覽に「しやむとはもと通雅より渡りし鶏なり」と。

しやむろ しやむろ唐染色色に(融大臣)

〔通雅〕更紗染をいふ。本朝世事談綺衣服の條に「通雅は國の名なり、……此國よりわたりたる染物を携して日本にて染ぬる、又華布と云ふ」。まづ初章の空色に云云」を見よ。

***しやら** しやらな丁稚あがりめ投けてくれん(曾根崎) ひよこ・ひしこ・ひともし、えいしやらくさいふ

二瀬仲居も小さし出(重井筒) おお

此長作が粉にばたかれても取つて見せう、やあしやら臭い常常の嘉平次とは違つた生玉) ああしやらくさつ(三介三藏) 丹波興作

くさつ(三介三藏) 丹波興作) しやら臭い誰を供に、(會稽山) しやら聲に上する女子の取廻し(酒吞童子)

〔酒吞童子〕氣障りな出過ぎた。しやれ。〔酒落臭い〕生息氣臭い、生息氣臭いと云ふ意である。しやらくさつのをひかけたのである。かくしやらくさつと云ふ語の能う用ゐられるのも、蓋し當時の口吻を傳へたものである。可笑記(寶永版)三

に「傾城といへる者は、うはべを宜しき花袖を着飾り、油とらるる鏡黒く薄化粧に花奢めかして、しやらなる風情をおもてにし」

西鶴名媛之友(元禄十二年刊)卷之三、腰ぬけの仙人の條に「世のはやり言葉に、人にかはりたる風俗を見てしやらくさいといふ事、泉

州の堺に藤井道庵といへる俳諧師の名業を社樂といふ、世間つてんが口になれる始めなり。怪談語國物語(享保十一年刊)卷三に「おふにひな事をのをしやらくさいといふ事とせむにひなはせりしやら聲」とは、酒落た聲。あたふたの聲。

***じやくら** 泊々の赤前垂にじやれくら致さないやうに(丹波興作)

でれくらと山嵐のこと。風流今平家(元禄十六年刊)今様歌集の條に「殿達の氣に入れば心にかかる憂きこともなく、酒飲んでしやらくらと面白くといふに(按ずるに)じやらくらる前條のしやらの變つた語である。嬉遊笑覽に「越前の三國あたりには、遊女のことをシヤラと云ふとあり、今もオシヤラクと云ふ」と見えてゐる。このオシヤラクもここにへる意味から遊女のことと云ふ

やうになつたものである。好色三代男・卷之三、開闢したる北國女の條に「此所に名高きしやらには幾世月玉川萬作など」と指折りて語を聞けば(と見えてゐる)。

しやらさうじゆ 「さうじゆ」を見よ。

しやらほどけ 結ぶ心のしやらほどけ、うはべはさらぬ振なれど、下行く水の流し目は、さながら戀をふくみぬ(伊豆日記)

〔酒落解〕さつぱりと解けるをいふ。しやらどけといふ。好色五人女・卷一、太鼓にふる獅子舞の條に「すこしなやむ風情に、袖袂取亂して、帯はしやらほどけをその、繼に」。女大名丹前能元禄十五年刊)卷二、繼結び難波張良の條に「深い男と口説の花、髪しやらどけに帶しどけなく」。

しやらりん 「さうりん」を見よ。

***しやりほつ** 舍利弗・文珠の智慧にても即座にやばか解くべきか(嵯峨天皇)

〔舍利弗〕梵名 Śariputra 佛十大弟子の一であつて、佛弟子中智慧第一と云はれた。法華經科註に「増一曰、云我佛法中智慧無窮、決了諸疑者舍利弗第一、又曰、暨年十六究三盡典籍無事不聞博覽古今演暢幽奧十六大國論議無雙、五天竺王最爲第一云云」。盡典籍無事不聞博覽古今演暢幽奧十六大國論議無雙、五天竺王最爲第一云云。

やうになつたものである。好色三代男・卷之三、開闢したる北國女の條に「此所に名高きしやらには幾世月玉川萬作など」と指折りて語を聞けば(と見えてゐる)。

しやらさうじゆ 「さうじゆ」を見よ。

しやらほどけ 結ぶ心のしやらほどけ、うはべはさらぬ振なれど、下行く水の流し目は、さながら戀をふくみぬ(伊豆日記)

〔酒落解〕さつぱりと解けるをいふ。しやらどけといふ。好色五人女・卷一、太鼓にふる獅子舞の條に「すこしなやむ風情に、袖袂取亂して、帯はしやらほどけをその、繼に」。女大名丹前能元禄十五年刊)卷二、繼結び難波張良の條に「深い男と口説の花、髪しやらどけに帶しどけなく」。

しやらりん 「さうりん」を見よ。

***しやりほつ** 舍利弗・文珠の智慧にても即座にやばか解くべきか(嵯峨天皇)

〔舍利弗〕梵名 Śariputra 佛十大弟子の一であつて、佛弟子中智慧第一と云はれた。法華經科註に「増一曰、云我佛法中智慧無窮、決了諸疑者舍利弗第一、又曰、暨年十六究三盡典籍無事不聞博覽古今演暢幽奧十六大國論議無雙、五天竺王最爲第一云云」。盡典籍無事不聞博覽古今演暢幽奧十六大國論議無雙、五天竺王最爲第一云云。

***じやれる** 今のは何も皆じやれちや嘯ちや嘯ちやと獵川被破) じやれてそばえて手毬取れ取れ(大經師)

戀も盛りの顔容はみすみす情あり氣なり。何でもこれにじやれかかれば宿貸しさうなものなり(持統天皇)

「あさける」(文語あさる)の説であつて「さる」とも云ふ。人の戯れくつがへるを云ふ。

入魂の人人は瀧口と云ふ好色者に
伴ひ、浮名を流す左京の進(義)
「入魂親密。慧意。源平盛衰記・三五、高綱
渡三宇治川」の條に「木曾殿の入魂の郎黨には
よもあらじ、一旦附従ひたる人どもにこそあ
るらめ」

しゅじけき

裳なし衣にしゅじけき袈裟
かけ、六尺ゆたかの大坊主、御首
の中より躍出て(女護島)

「種字袈裟」輪袈裟をいふ。僧侶の首に懸ける
もので、光明眞言等の種子の梵字を誦いて内
に封じ籠めたりこの種がある。聖道衣料
編下第十一に「夫れ輪袈裟の蓋勝何れの代
誰の師制したりと云ふことを知らざれども、
掛けることの由來已に尚し、世に傳へ云ふ、
大衣の左右上下の甲を取り用ひて著する意な
り、是は還路往來に便宜の能き爲なりと、
又は是を種子袈裟と名付く、光明眞言等の
種子の字及び咒眞言の字を書寫して、内に封
じ籠めて著するが故なりと、然れども今時商
人の賣買の所の輪袈裟は如し是にはあらざる
もの歟」

しゅじやう

衆生一生造惡不斷煩惱
の塵に交はり(蠅丸) 衆生濟度の説
法をこの所にて説き始め(青庚申)

「衆生」一切の生物をいふ。一には衆と共に世
に生じ、二には衆多の因縁和合して世に生
じ、三には塵塵に生を受けるによつて衆生と
いふ。蠅丸のこの文は、衆生はその一生涯始
終罪惡を造り、心が物に迷ひ悩んで絶え間
なく塵俗に交はるとの意。衆生濟度とは、苦海
にさまよへる一切の生物を救済して、淨土の
彼岸に度すことである。即ち説法してその迷
闇を解き、以て煩惱を除去して悟を開かしめ
ること。

衆生無邊誓願度

(釋迦)
一切の佛菩薩の道願である四弘誓願の一であ

つて、無量無邊の衆生を濟度せうとの誓願を
いふ。「しゅじけきいん」を見よ。

しゅじよ

「しん」のしゅじよが母云云を見よ。
珠數の百八(曾根崎)

しゅすびん

兜を脱いで太元結、鬘
附縹子餐天驚絛脚絆(冷泉節) ハレ
よい男の、江戸元結に縹子餐、女腹
切) 新月代の淺翠、翡翠の縹子餐・
蟬折の(五人兄弟)

「縹子餐」兩鬘を張出して毛筋を透さぬ様に髪
を結うたもの。囃出芝居に、燈籠髪は兩鬘を
張出し毛筋を透したるなり、縹子餐は毛筋を
透さぬなり。

しゅせんざけ

天目に御器しゅせん
酒、一兩二歩の取替(薩摩歌)
「集酒酒割前を出し合うて飲む酒。好色五人
女(貞享三年刊)卷一に「あたふ歌みて吞も
のまめ七文づつ、集酒出し、御器もなく
小桶に汁兩入て、飛魚のむしり肴。萬の文
反古(元祿九年刊)卷四、おのしら祖母の埋
み金の條に「誦屋の武太夫殿へ式奴七分五
厘御はらひ、是は集酒出しの御付と御斷り願
ひ候」

しゅだ

(百日曾我(平家女護島)(實古教信)
「首陀」梵語 Sudra、昔時印度の社會階級に、
婆羅門・刹帝利・毘舍首陀の四種あつて、首
陀は田夫野人の類である。釋摩訶衍二に
「戒違違古云首陀羅或首陀、即是農夫耕墾之
佛也」釋曲 錦木に「奈落の底に入りぬれば
刹利も首陀もかはらざりけり」

しゅだう

俗も尊も若衆の情、衆道
秘密のお山とかや(萬年草)
「衆道」若衆道の略。男色の道。

しゅたら 空に轟くしゅたらの聲、
壇上に火焰を降らし(以白燈) 修多
羅の聲も川風も天に響きて有難
し(蠅丸)

しゅだん

「しゅだん」浮世を離れし手談のわ
ざ(國性進)

しゅだん

「手談」國性を云ふ。世説新語補、卷十六、巧藝
に「王中郎、以國性是坐、支公以國性爲
手談」下學集、應雲衛に「國性又云手談」

しゅちやうづき

あられ神樂堂
の蔭、繪馬の長鏡にあり似た奴、
しゅちやう頭巾で顔隠し、此方な
見ぬ風にて眼を放さず(猿蓑)

しゅちやう

「首丁頭巾」法師武者が専ら出陣の時被つた頭
巾であつて、紺布にて括り後の方を
廣くし、中一所はかり縫ぢたる
もの。源平盛衰記、卷十二、教
盛夢忠正爲義二の條
に「或は師衣に不動裝
束かたり、或は羅兜に鍔
著たり、或は首丁頭巾に腹巻着
たりなどして」

しゅつくわい

扱も源の頼義はこ
の師氏を武將に補せられしことを
述懐に存じ、只今取かけ申す由承
り候(大掛物)

しゅつとう

軍の場数は御出頭の工
藤殿も及ばず(會稽山)
「出頭」武家名目抄、職名部に、「出頭人は講第

しゅつとう

にもあれ新參にもあれ、登用せられて常に君
邊に昵近し、政務に與る者をいふ、……定ま
れる職名にはあらで、三管領、四職以下奉行
人に至るまで、當時の政務にあつかりて、評
議の席につらなる事をば、なべて出頭といひ
しなり」

しゅつない

いかに身が術ないと
て不器用な氣になつた(生玉)
苦しうごさる、じゅつないかた、
言ふも涙にかきくれて(博多) 此方
様をと、とんと凭れしその重さた
だ磐石の如くなり、民部じゅつな
さ一時に命も縮む心地にて(西王母)

しゅつない

「術無せんすなきをいふ。轉じて、苦痛烈
しく胸苦しきをいふ。橘守部撰、俗語考に、
「都太りの詞に、むねくるしき事をじつ
ないといふは無術にて、せんすなき方より
り轉れる也、東國にては此意をせつないとい
ふ」

しゅつたり

是ぞ出離の門出と、誓ふ
つつと掻切り(大原問答) 出離生死
の御誓み(淨常盤)



〔中頭丁首〕

しゅつたり

「紅紫分けつつ行けば錦著て云云を見よ。
*じゅはん 心得ましたと帶もせず、
じゅはん一つの裸身や、百貫町へ
ぞ走りける(今宮)

しゅばん

「じゅばん」を見よ。
*しゅひてり おお主早はいかす斯
波に扶持を受けんとは勿體な

し(聖女)

「主母」主取に事を缺かすこと。「ひでり」は拂底の意にいふ。男の缺乏を男ひでりといふ語もある。狂歌机の塵(永田貞竹編)に「尼寺端。尼寺の端の音さえて夜もすがら、男ひでりを喝明すらん」のききなり。

じゆふかくく 「野崎参り」を見よ。

しゆばだい 行ひは須菩提(大原問答)

「須菩提」梵語の須菩提の音寫である。譯して善果尊者といひ、釋尊十大弟子の一人である。舍衛國の富家で慈善心深く、色の善業に盡した。釋尊が祇園精舎で金剛般若波羅蜜多經を説かれた時、その對告衆の代表者となつたのも此尊者である。

しゆみだん 七重八重の須彌壇を屋形の内にしつらひ(本領曾我)

羅生門の東西に七重の須彌壇を構へ(以呂波)

「須彌壇」佛像或は佛龕を安置した壇であつて、其形を須彌山に象るによつてこの名がある。

*しゆみのかみ 袴の裾に風受けて、さざ波寄するしゆみの髪、しつしつしつと乗戻し(鏡権三)

「しつと」といふ。その條を見よ。武家名目抄奥馬部に「大坪流馬書云、あかり馬の事。先しゆみのかみを取て、かたかたの體をうかしおるなり、有口傳、馬あからは急しゆみのかみに取付給ふべし云云。

じゆみやうのまつ 野田の片町大和川、こゝは名に負ふ壽命の松、御代長久の岡山を歌には忍の岡とも詠み(女殺)

「壽命松」河内國北河内郡甲可村字岡山に生茂してゐた老松の名である。地名を「かやま」「しのびの松」を見よ。

じゆふかくく しゆんあうてん

*しゆむ 二階に酒のしゆんだ頃祝言の石をぶちこんで(萬年草)

「しむ」(逢)の訛。酒を身に浸潤するをいひ、酒宴の酣なるをいふ。萬葉集、卷三雜歌部、太宰府大伴御頭酒歌十三首中の歌句に、「酒盛二成而御頭酒二染世。傾城太々神樂(寶永二年刊)卷之三に「よひ程話のしゆんだ事もあるべし、すでに居なれて朝迄もかしかるなり。富官節(寶永四年刊)に「扱やうやう酒もしみける折ふし、與介がいづれへ披露するは云云。近代長者鑑(正徳四年刊)卷之五の挿畫に大黒舞の繪ありて「しゆんだはしゆんだ」と註記してある。酣であること意である。

しゆもくざや 阿波淡路兩國主撞木鞘と丸十文字(薩摩歌)

「しゆもくざや」撞木鞘(徳島城主、蜂須賀淡路守綱紀の撞標。

しゆら 修羅の獄卒(出世歌)

前の御馬の口は蛇に綱ついても引廻し、雜兵の首四つ五つは寝起きになりとも仕らん(常盤修羅燃すそなたを呼びに來るも彌陀如來(寶庚申)最勝河原が舟岡へ直に飛ばうと思ふ氣で、私が爲の修羅出立ち(反魂香)

しゆら 泥餡汁の集禮代、取りき

「修羅」梵語阿修羅 Asura の略、六道の一。修羅族は惡心強く猜忌嫉妬妄執の念旺盛で、常に闘争するによつて、これを戰場に喩へて修羅ともいひ、また人が嫉妬忿憤に關するに喩へて、「修羅を燃すそなたを呼びに來るも彌陀如來」とは、修羅道に旅立つ義で、冥途に旅立つ姿、即ち死裝束をいふ。「あしゆら」を見よ。

しゆらい

「泥餡汁の集禮代、取りき」

しゆりさんまい 六七日は法要のし

しゆりさんまい 六七日は法要のし

しゆりさんまい 六七日は法要のし

しゆりさんまい 六七日は法要のし

しゆりさんまい 六七日は法要のし

しゆりさんまい 六七日は法要のし

しゆりさんまい 六七日は法要のし

しゆりさんまい 六七日は法要のし

しゆりさんまい 六七日は法要のし

る間は何處までも附きまづける

「三枚總」内衆酒の爛しやれ、一つ飲んば休みたま。集禮も書付あるならば代物遣らん(永明日) しゆら いなき人とにせがまれて(虎が屠)

「集禮」飲食物などの諸式勅定。もと智禮の字で、禮式を稽古することを云うたので、史記、孔子世家に「孔子去曹遷宋與弟子習禮大樹下」と見えである。轉じて諸禮を稽古する費用をいひ、更に轉じて集禮と書いて、飲食物などの諸式勅定のことをいひ、上方詞である。似枝蜂物語中に、「あけ鏡しゆらに鏡急にえけは、延ることもくつるける事もならずして、愚願の道心者、主人にも勤當せられ。好色大鑑(元祿五年刊) 大阪新町由來の條に「太夫四十六女、もらひしゆらひ外に拾六女。好色三代男(貞享三年刊) 卷之三、情の淺き鏡の數ほどの條に「兎角わづくれなにかしき事をして集禮をとへば、花代其外僅かなる諸式、この心やすき。攝州雜談九元祿十年刊に「女一人二時を限り、あけ鏡七夕しゆらには十五夕其座の趣向次第。

しゆりけん 丸腰なれどもこれ見り(日本武尊)

「手裏劍」手の裡に持つて敵に投付ける小さな刀であつて、小柄の刀の如くして鐵製の柄が附いてゐる。

しゆりさんまい 六七日は法要のし

しゆりさんまい 六七日は法要のし

しゆりさんまい 六七日は法要のし

しゆりさんまい 六七日は法要のし

しゆりさんまい 六七日は法要のし

しゆりさんまい 六七日は法要のし

しゆりさんまい 六七日は法要のし

しゆりさんまい 六七日は法要のし

しゆりさんまい 六七日は法要のし

しゆりさんまい 六七日は法要のし

しゆりさんまい 六七日は法要のし

しゆりさんまい 六七日は法要のし

しゆりさんまい 六七日は法要のし

華等の偈を唱へて供養し、四に梵音の次に手執錫杖の偈を唱へて錫杖を振る。これを四箇法要と云ふ。その二箇法要を行じて、理趣經を讀む勸行式を法要の理趣三昧といふ。

*修理の頭(出世歌)

宮殿の造修修を掌る修理職の長官である。

*しゆりはんどく しゆりはんどく

「阿房」でも、あじやせ太子の鬼子でも、母の身で何の憎からう(安藝)

「周利槃特釋尊の弟子となつても資性愚鈍者だによつて、經を讀んでも何一つ覺えることが出来なかつたが、遂に忽然大悟し阿羅漢の果を成就した。委しくは増一阿含經を見よ。

受領職 刀屋石見何某とて諸役御免の受領職(安國切)

「受領職」受領は國守を云ひ、國守を何の守と云ふやうに、刀工を何の守といふことあれば、刀工を受領職と云うたのである。

しゆれんばう 門破られては生目がない、しゆれんばうで打ち殺せ(唐船歌)

「手練」手馴れて鍛練した強弓。

*しゆらう 其方達はしゆらう鼓樓に上つて、すばといはば鎖太鼓一度に打つて打立てよ(加増曾我)

「鐘樓」大鐘を懸ける樓即ち鐘樓である。昔時鐘樓は鼓樓と相對して講堂の傍に建ててあつた。

櫻欄の一本の相生 櫻欄の一本の相生

「櫻欄」の森を天神の森とも云ひ、この森に一つ根本より二幹の櫻欄が生茂してゐた。地名部「そなきの森」を見よ。

しゆんあうてん 爰に貴德樂春鶯

しゆんあうてん 爰に貴德樂春鶯

しゆんあうてん 爰に貴德樂春鶯

しゆんあうてん 爰に貴德樂春鶯

しゆんあうてん 爰に貴德樂春鶯

しゆんあうてん 爰に貴德樂春鶯

しゆんあうてん 爰に貴德樂春鶯

囀の鶯に誘引せられ、芹摘の後は
唯獨り(聖徳太子) (舞樂圖説所載)
〔香獨舞舞樂の名。唐の高宗
が樂工白明達に命じ、
鶯聲を寫し作らしめ
たといふ説がある。〕

*じゅんぎ 世

の中の義理
じゅん
ぎを知
るが最後、
貧乏神が乗り
移る(酒吞童子)



〔轉鶯春〕

じゅんさい

私も病者な父様を先へ
送るがじゅんさいな、却つて憂目
を見せまする(晉庚申)



〔いさんゆじ〕

じゅんしゅ

唐土の聖代の巡守にな
ぞらへ、交野の御野の櫻狩(舞九
巡守)天子諸國を巡るを云ふ。書經、舜典に
「五載一巡守。孟子、梁惠王下篇に「天子巡
諸侯曰巡守。巡守者巡所守也」。
じゅんじゅく 親が勸當するとして
も、たてになりかけになり詫言し
て、兄弟がじゅんじゅくするこそ
家繁昌(源義經)

〔順熟〕善く和らぎ睦むこと。平家物語卷十
一、腰越の事の條に「然れども交契忽に順熟
して、平家の一旅追討の爲に上洛せしむる手
合に」。

じゅんしゅん

蠢蠢たる懐生(ハルイダウ) 唱
たる唱類(囀) 晉書 天文志に「庶
物蠢蠢、咸得繫命」。

じゅんやうかん

饅頭・菓子麵・笋羊
羹(天神記)
〔笋羊羹、羊羹の一種。尺素往來に「臘腸羹、
笋羊羹、白魚羹」。

じよう

高砂の尉と姥が離別した
やうな形で(露門松) この尉も參詣
は望みなれども(嵯峨天皇)

じようきだいじん

ばたと呪む眼
色は、さながら鍾馗大臣の惡魔を
制する如くなり(天竺經) 八方に矛
振廻す其勢、鍾馗大臣素盞鳴尊も
かくやとすまじし(天智天皇)

〔鍾馗大臣〕と支那で疫病の鬼を驅る神とし
て畫かれたもので、其形無冠を被り長靴を穿
き抜刀を提げてゐる。委しくは蘇林山(筆
蓋續編)に收む。卷四に見えてゐる。我國では
素盞鳴尊を鍾馗大臣といふことがある。こは
八東郡野辨正に「髮當作髭髮云、十握髭
斷、蛇寸許、素尊威、本朝皇季皇邦鬼、其道
鍾馗(尸)尸」とありて、これ等よりいひだ
したものである。

じようげどり 兎やせん角やしよ
うげ鳥、鵲の嘴のくひちが
ふ(冥途飛脚)

「じよげどり」の延びた語。「じよげどり」を
見よ。

じやうじやうてん

御本社(の)じやう
じやう殿の階を、降りて下りて待
受け悦び給ふとかや(反魂香)

〔證誠殿〕紀州熊野本宮の第一殿を證誠殿、第
二殿を西御前、第三殿を若宮と稱す。又第一
殿・第二殿・第三殿を上四社と總稱し、第四殿を中四
社と稱し、第五殿を下四社と稱し、これを合
せて十二所權現と稱す。十二所權現の稱は三
山にづれる同じ。寶賢に「證誠殿法體(或號三
證誠大菩薩、或號泉御子、稱地主權現、本
地阿彌陀)。

じようじよう

萬木は欣欣と草茸茸
たる中に(十二段)

じようまんぶにん

勝鬘夫人は大
王の一通の文を得て恒沙の衆生を
濟度あり(聖徳太子)

〔勝鬘夫人〕勝鬘夫人とも書く。天竺・舍衛國
の波斯匿大王の女で、釋尊在世時の人である。
釋尊に師依して三大願を起し、更に恒沙の願
を接する。一大願を起し、一佛乘三種人(略し
て勝鬘經と云ふ)これである。

じようみやう

行住坐臥に稱名は
缺かしませぬ(女教)

〔稱名〕佛名を稱する義。普通に阿彌陀佛の名
を口唱するをいひ、南無阿彌陀佛の念佛を唱
へること。

と對陣し、塵戦を挑んでも仲達が戦はうとし
ないで、孔明乃ち丈夫の志なきを鄙ふに中
婦人の眼を贈つた。夫の三國志のこの文
は、中婦人の眼を贈つたのは、我を侮つて
敵に油斷させる謀に似てゐたのである。源
義經將英經のこの文に就いては「死せる孔
明生ける仲達を走らしむ」の條を見よ。

*じよが

よれ様の寝姿窓から見
れば、花ならば初櫻、月ならば十
三夜、盛りまだけしき闇の内、さて
は野に咲く百合の花、じよがふ、
少くわん(女補)

〔じよがふ〕「じよがふ」は「じよがふ」といひ、唄拍
子の詞である。晝夜用心記(寶永四年刊)卷一
に「命をじよがふに節につなぎな」といひ、
〔踊の〕一流に名を得しじよがふの姿とある
から、踊歌の拍子詞である。吉野郡女補のこ
の文は踊歌であつて、それを歌比丘尼が唄う
たのであるから「少くわん」その條を見よ。
と歌の終りに附けたのである。「大工殿より云
云」をも併せ見よ。

じよくえつ

大酒食悦おかげを蒙り
八十末社、さすがの廓駕籠きれ
て(淀屋)

〔食悦〕うまい物を食うて悦ぶこと。傾城色三
味線(元祿十四年版)謡之卷に「同じくはうま
い物食はせて置て、ともかくもして呉れば
まづ食悦だけの徳なりと、世に連れてさし
きんになりて」。

*じよくかうのにしき

蜀江の錦で
も戴いて召しませうか(夕霧)

〔蜀江錦支那の蜀の成都から産出する錦。山
謙の丹陽記に「歷代尚未有錦、而成都御稱
之。和漢三才圖會に「按有年蜀江錦者、之
厚而美不可言、其綢多雲龍也、今稀有焉」。

*しよくきん 越羅蜀錦(國性錦)

蜀の單福 「たんぶく」を見よ。

*しよげ 僧は關東の所化、用事あつて昨日京着致せしが(藝樂太平記)

所化の契約なさん爲ここれまで迎に來りたり(賀古教信)

*しよげ 抱かれて見たいと抱付けば、さすがの藤内しよげになり、扇の骨で白壁に小坊主書いてぞ居たりける(靈女) 分限者の下屋敷なば兩隣、中に挟まなればしよげ鳥の浪人の巢のとりぶきやね(大經師)

情氣。悄然として元氣なきをいふ。しよんぼり。悄然たる人をしよんぼりした鳥に喩へて「しよげ鳥」と云ふ。閑取千兩帳。猪名川内の段に「しよこ路み鳴す鐵が鐵。こなたは猶もしよげ鳥の、しをしを上げる土俵のうへ」

しよげる 寝るときは揉圖でしよいて來い、まづそれまでは一盃あげてしよげるべし(安楠) びくにん呼んで念佛講、丸太ぶしんでしよげるべし(吉岡榮)

*しよさい しまさいこそ出女なれ、お大名へも知られた關の小萬(丹波興作) 人の見ぬ間に思ふ程泣くを所在か味氣なや(反魂香) 我等がしよさいひつしやりほん、御法度背さしはいつそてんぼの皮巾着(安楠)

「所在」在處の義。轉じて、身分。仕業。

*しよさい 夫のこと我子のこと、母にじよさいがあるものか(丹波興作)

あの人も氣にじよさいはなささうな(大經師) つらやじよさいと怨むらん(三世相) (冥途飛脚) これでは

ちももじよさいがならぬ(今宮心中) 祐様も時様も一度にさぬ顔も見ず、あつたら男をむさむさ殺したか少將様(加増曾我)

「如在」で、「ぞんざい」(存在)と尊しく、ありの儘といふことで丁寧にせぬ義であらう。疎略。かきり。ておち。下學集に「如在。此二字即尊敬之義也。然日本之俗書狀云「存」存如在、大失正理也。論語曰、祭如在、祭神如在。神在云云。可思之也」と見えてある。以て文安以前既に「如在」を論語に用ゐてある意義に云はなかつたことが知れる。よつてまたこれを論語から出た語たとするはいかであらう。貝原好古撰 詠卿に「如在。論語八佾篇に出たり。俗に人に疎略するを如在と云は頗意義あるなり。云云」。易林本節用集に「如在」。

しよちり 歩き振は家鴨の所知入、物ごしは破れ鍋(振袖姑)

「所知入」諸侯が知行を領して入國することを云ふ。「家鴨の所知入」とは、家鴨が尻を振つて歩く様が、諸侯が所知入の行列に、奴が威勢よく腰を振つて行く様に似てゐるから云うたので、以て腰を振つて歩む異様な風體に云うた洒落である。

しよところ 長刀をしよところに構へ、群がる敵に割つて入り、紅葉を散して戦ひけり(用文章)

*しよてんさんぼう 言譯あらば眞直に申せ、道理が立たずば諸天三寶言葉の下に討つてすつるぞ(西王母)

「諸天三寶」天部の諸神と佛法僧。ここに云へるは、諸天三寶も照覽あるの意で、「佛神三寶」「司天八輔」「愛若日山」などと云ふに等しく、自讃の詞である。

じよはきふ 陰陽のしらべ序破急の三段に五調子をしらべかへ(三世相)

「序破急」雅樂の曲體、即ち節度の稱。序は一曲の最初の部分を指し無拍子のものであり、破は多く中曲の緩歌を指し、急は小曲の早歌を指していふ。この序破急三體の節を合して一樂曲を組織するを普通とすれども、その一體を缺き或はまた一體のみで成れるもある。

しよや 秋の初夜過ぎ早夜中(薩摩歌)

まづ初夜の太鼓を打つ時は諸客盛んと響くなり(扇八景)

「初夜」初更ともいひ、戌の刻即ち今の午後八時頃である。浪花方言に「初夜。戌の刻なり、五つとは決していはず、上下男女とも總て初夜と唱ふ。曾我扇八景のこの文については「まづ初夜の云々」を見よ。

*しよらう 小松殿の御所勞良藥醫療の驗もなく(孕婦惡)

所勞と披露し(抱經)

「所勞」所勞の略で、いたはる所あるとの義。病氣(序云、有志などの語は有志の所が略されたのである)。

しより 大梯子を五六挺、横に垣楯しよりを付け、四方より締寄せ(千足大)

「しより」(義)の語。曲け揃へること。

*しよあん しまんのうらなしお

つ取つて、一ふり振出す手の内に、握り治むる六十餘州(三國志)

「書院」易林本節用集に「書院」。書院は僧侶の勉強する處の稱なるが、後に轉じて武家の表座敷をいふ。

白頭の振秀 白頭の振秀・二本松の城主とかや(薩摩歌)

槍標。奥州二本松の城主丹羽三郎重忠の槍標。

しらかはいし 向より白川石を商ひに、賤の鳴らが馬追ひつれて(堀川波鼓)

「白川」石京都の北白川から出る石。その石を馬の背に負はせ、その土地の女などがその馬の口(百人女郎品定所載、西川祐信書)を取つて都に賣りに出たものである。

心ひやう(寛文五年刊)とある本の第二巻に、「白川山の石實は是き木娘に置手拭、女子どもがつれたちて京町を馬を引き、石めされよと賣るぞかし」都名



〔賣石川白〕

所謂三に「北白川（人倫訓蒙圖説所載）の里人

は石工を業として、常に山に入り石を切出し、

鑿鑿手水鉢其外さまの物を作

りて商ふなり。



〔寛石川白〕

しらがやくし 老人達の老病には白

髭明神白髮薬師（女殺）

「白髮薬師」謡曲・白髭（此謡曲は太平記にあ

る）に、志賀の浦の邊に釣を垂れてゐる老翁

があつて、其老翁は六千歳の昔から比叡山の

主として琵琶湖が七度原になつたのを正しく

見たと申し出た時に、淨瑠璃世界の主薬

師忽然として出で、我は二萬歳の昔から此所

の主であれど、老翁また我を知らないといふ

れたことが載つてゐる。この六千歳の老翁を

白髭明神と申すのであるから、果林子はここ

の文に、二萬歳の薬師を白髮薬師と面白くい

はしたたであらう。そして「老人達の老病

には」から、白髭白髮の謡曲を神佛の名に取

つてひつづけたのである。

しらごかし 今改めて「りやばつと

打直すはと、捻ぢて出せ」鼻紙の、

しらごかしこそ笑止なれ（二枚増）

「白髭」白しに、白紙を髭はすちひかけ

た語。（二）の「ごかし」を「お爲ごかし」「上手ご

かし」の「ごかし」と同じとするはいいが。

しらさえび しらさ海老にて煮を釣

り、麥飯で鯉を釣るは子供わ

ざ（註合選）

「白き海老多くは潮水と淡水と交る所に棲息

し、薄白き小海老である。

*しらす 守護職太刀提げ白洲にお

り立ち大に怒り（三世相）外垣を

押し通り、御白洲の内垣に薔々と

縋り付き（園扇曾我）

「白洲」昔は訴訟を管理したり罪人を結問する

場所、白砂を敷いてあつたから白洲と云ふ。

法廷。狂言 右近左近に、「ちと公事がござつ

て、御白洲へ通りまゐる。」

しらすげ 小菅、

白菅はいは

ま菅（用明天皇

「白菅」草の名。

しらたて

「白髭」八十歳の白髭を見よ。

*しらなみ 頼平とはしら波の、直下

に見るぞあまりなる（關八州）

「白波」盜賊の異稱。後漢書・靈帝紀に、「靈帝

中平元年張角反、皇甫嵩討之、角餘賊在東西

河白波、時俗號白波賊」。この文は「知ら

ず」に「白波」をひかけ、白波の縁から「直

下」に見るといひつづけたのである。

しらぬひ あぶなき分限波の上、何

百里とも知らぬ火の、心づくしな

過ぎし身は（博多 別れ行く船路の

末も不知火の、筑紫は雲に埋めど

も（國性寺）

「不知火」知らぬを筑紫の枕詞なる「不知火」

にひかけたのである。不知火は肥前沖に現

はれる燐光で、今も陰暦大晦日の夜などに現

はれると云ふ、俗に千鶴燈ともいふ。

しらひげ 身の程をしら髭・八島



「白菅」

のくづれ、諸道具のけげの

梅（酒吞童子）

「白髭」謡曲名。近江國比良山の麓なる打下

といふ處にある白髭明神の縁起を作つたの

の。この文は白髭に知らぬをきかせたので

ある。

*しらびやし 傾城白拍子に身を持

崩し、今度の大事にはづれし奴

（大織冠） 年月の物思ひ、傾城白拍

子の憂き勤もこれ程にばよもある

まじ（孕常盤）（七十二番繼人藝歌合所載）

「白拍子」昔の舞妓、遊女の稱。

白拍子は舞の名で、その舞を

なした舞妓を白拍子と云

ふた。鳥羽院の頃鳥

千歳及び和歌の崩とい

ふ二人の女の舞始めた

もの。水干を着け立鳥

子を被さ、白絹巻をさいて

舞うたのであつたが、後

は水干ばかり着けて舞うた。

*しらまゆみ 鎌田はそれともしら

ま弓（鎌田） 今宵限としら眞弓、引

返さじと（世繼曾我）

「白眞弓」白木の弓。「眞弓」の「眞」は美稱に用

ゐた接頭語である。この文は「知らず」を白

眞弓にひかけたのである。

しらる くりや長作十六兩ただしら

れ、夫がぞもとに嘉平次がうるた

へ始め命沙汰に及んだ（生玉）

「してやらる」略されたもの。策にかけられ

て取る。

しらうたぐ 砂金のまろがせ盤に積

み、御階のもとに尻うたげ、是は

東八州の大將外の濱の忍熊が執權



〔白拍子〕

筑波の長脚といふ者（日本武尊）

「しらうたぐ」（尻打上）のつまつた語。

*しりがい 馬のしりがい鞍壺かけ

て突きければ（舞丸）

「しりがき」この音便。尻懸の鞍。馬の尾から鞍

にける粗筋。駈。

じりくちくすい 昨日は雲井の住居

して女御后にかしづかれ、じりく

ちくすい引かへ、蔚山が獄しんし

んと（三國志）

種補以眞撰・難波土庫・卷四に「本朝三國志

の大王の道行に、御いたはしや大王はちりく

ちくすい引かへてあます峠のころの道と書け

り、京都のさる俳諧師此ちりくちくすいの語

をあんじ頼ひて問ひければ、是は大王夫婦の

道行ゆゑ、くちりくちくすい引かへてといふ假

名を、上へ置かへて用ひたりと答へしとか

や」と見えてゐる。原文とは相違すれども、

いづれこのやうな事であらう。

しりくめのしめなは しりくめの注

連細引渡して（振袖始）

和訓表に「しりくめなは。神代紀に端出之繩

をよめり、倭名抄に注連をしりくめなはとよ

めり、………繩の尻をこめたる繩也、今のしめ

繩即是也。」

*しりさや 五尺餘りの大太刀に熊

の皮の尻鞘入れ、編笠がたぶけ立

つたは（鎌田）

「尻鞘平義勝談に「尻鞘は虎豹鹿熊等の毛皮

にて袋を作りて鞘にかけたるなり、濡にあへば

太刀さびるゆゑ糸雨蓑を防がために尻鞘を用

ゐるなり」。保元物語・卷一、新院御所門前か

ためいくさ評定の條に「三尺五寸の太刀に熊

の皮のしりさや入れ。」

*しりる 蹠掴んで尻居にどうと突

伏せ(天神記)

「尻居しりもち。倒れて尻を地につけること。
印付の環 七郎は印付の環をなけて
握つたり(蛙合戦)
槍の帶脚金の所にある環であつて、槍標をつ
けるもの。武家名目抄・刀部部に、「印付標。
今无。」

しるしの杉

「三輪のしるしの神杉云云」を見よ。

しるしのほ

六十はいつのこと、七
十に片足踏込んで、しるしのほのあ
る身でなす(加増曾我)

「汁・鹽・酒の意にいふ。色氣。汁鹽もないとい
は、無味乾燥で色氣も脾氣も無きといふ。
*しるよしす 横山の郡司信久は伊
豆相模をしるよしし、五人の子を
もたれしが(小栗判官) 下の醍醐に
しるよしして忘れ形見の涙の
種(烏帽子折)

「しる」は知行の意。「よし」は由緒の意。「す」
は有るの意で、「しるよしす」とは、知行由緒
あるの意に用いたのである。伊勢物語に「む
かし男ありけり、うひかうぶりにして、奈良の
都春日の里に、しるよしして狩ににけり。
しるい 蜂に上下の禮あり、鳥に反
哺の幸あり、人は四靈の長たる
や(聖徳太子)

「四靈」麟・鳳・龜・龍。靈は神靈の義。以上の四
つは皆神靈であつて他動物に異なる故に云ふ。禮
記・禮運に、「何謂四靈、麟・鳳・龜・龍謂之
四靈」。

*子路

異國の子路の勇にもまさる
(百日曾我) 關路にかかる勢は、子
路がせきもん・楚の鴻門・閻魔の廳

の鐵門も、踏破るべくすまじし

(釋尊) 子路が誦ひし劍の舞(龜山誌)
仲由字を子路といふ。孔子の弟子にして勇
氣あつた人である。衛の亂の時その難に與
り、父を以て鞭を斷られた。子路言ふやう
子は死すとも冠を免がぬとて、鞭を結んで戰
死した。

「子路が石門とは、子路が石門と云ふ魯城の
郭門に宿し、次の朝早く起きて門の開くを待
つて出ようとした故事に據つたのである。論
語・憲問篇に、「子路宿於石門、晨門曰、奚
自、子路曰、自孔氏」。

「子路が誦ひし劍の舞」とあるは、「古」の君子
云云」を見よ。

白一文字黒一文字 白一文字黒一
文字 山の内の紋
所(五人兄弟)

紋所の名。夜打曾我舞の
本寛永古活字版に、「し
ろ一文字黒一文字は山の
うちのもなり」。

しろとなげいせい おのればしら
う、しろとなげ城と侮つて我儘
言ふな(蛙合戦)

七草四郎の「四郎」に、「白人な傾城」をいひ
かけたのである。

白熊の角袋

白熊の角袋、杉形の中
締は豊前の小倉(薩摩歌)

「白熊の角袋」は、小倉城主・小笠原右近將
監軍 雄の
槍標。

しろごろう 四郎五郎が不心中、面
白いとて笑へども、私や一日泣い
てゐた(卯月紅葉)

上方で立役の名優であつた中村四郎五郎を云

ふ。寶永三年の夏、頼朝の岩井半四郎座に
てお染半九郎の心中狂言(即ち鳥部山心中)
を上演した時、四郎五郎が浮氣男の車屋七兵
衛に扮し、松と云ふ茶屋女と心にあらぬ情
死を約し、女に引かれていよいよながら心中
に出て、無常の山に來て半九郎・お染の情死を
見、俄に怖氣が付いて逃出したことを演じて
好評を博した。この文に「四郎五郎が不中
中」とあるはこのことを云うたものである。

役者椿吉三味線寶永五年刊立役之部に、「上
上白吉・中村四郎五郎」とありて其藝評に「津
川殿夫妻連中の時、下男となりて提灯持ち
ての供へ、くつわの後家かみん殿密遊し、白小
袖着て心中中といはるる時、いやがらるる
顔つき、去年大坂にて鳥部山の不心中にて
大當し給ふ、其うつり故手に入つた藝此所大
で、只今では薩摩大に上り、仕舞さるる
事なし、其内あら事の武道得物、上上白吉引
合、當年の當りを見、來年は潤一分に黒吉に
成給へ」と見えてゐる。(序に云、寶永五年
刊の役者椿吉三味線に、「去年大坂にて鳥部
山の不心中」とあるからには、卯月紅葉の上
演も、寶永三年であつたことを立證するもの
で、外題年鑑に寶永四年上演したことに記せ
るは誤と斷すべきである。「はんくろう、お
そめ」をも見よ。

しろざ やつしば甚左衛門・幸左衛
門が思案こど、四郎三が憂いこ
と(女殺)

「四郎三」櫻山四郎三郎をいふ。大阪の名優で
立役を勤めた。役者金化粧(享保四年刊難波
の巻・立役之部に「上上白吉・櫻山四郎三郎」
とありて其藝評に「いさみのある藝のしこ
し、あつぱれお上手さんちやぞ云云」と見え
てゐる。

白書院 白書院・黒書院・納戸・帳臺・
しろくしるん

化粧の間(用明天皇)

書院は僧侶の勉強する處の稱なるが、後に轉
じて武家の表座敷をいふ。白書院・黒書院は
書院を區別していふ爲の稱。

しろた うろたへて白たへ潜る しろ
垣(心中又水明日)

白鼠

白鼠、これは金山白鼠、吉野藏が建
ちませう(吉岡榮) 後には白鼠の富
貴と榮えるを、親鼠が見る嬉しさ
何うあら(露門松)

白鼠が家に棲みは福があると云ふ。抱朴子
に「鼠三三歳、滿百歳則色白、善為人而
下、名曰仲、能知一年中吉凶及千里外事
と見えである。白鼠を福とするのもこんな事
からいひだしたのであらう。

しろふくりん 「ふくりん」を見よ。
しろもち やい大名とはしろも
ち(女備)

白餅に城持をいひかけたのである、大名は城
主なれば城持といふた。

四王・初利

四王・初利 四王初利の大伽藍(香春
童子) 欲界のしわうたうりてん、
夫婦枕の夜摩の(五人兄弟)

欲強き有情的住める世界を欲界と云ふ。欲
界に六天ある。その第一天なる四天王と第二
天なる忉利天と云ふ。

しろ 四尺四面の立石えいやつと引
起し、高くさしあげ力に任せえい
やうんと投付ければ、四方四維に
地響して(安夫池)

道の書(用明天皇)

〔四章〕韋陀は婆羅門の傳へる所の經典の名 Veda の音譯であつて、吠陀などとも云ひ智 識または明論と翻してある。韋陀に四種あつ け、梨俱吠陀(Rig veda)と云ふは印度アリ ヤ民族が天然に對して歌つた詩句を集成した もの、沙磨吠陀(Sama veda)と云ふはソラ マ祭に於ける詠歌偈用として編纂された詩頌 句、夜老吠陀(Yajur veda)は祭式用の詞 文を集めたもの、阿闍婆吠陀(Atharva veda)は招福禳災の呪法を旨とした文を集めて ある。世にこれを四韋陀または四吠陀と稱し てる。諸乘法歌に「四韋陀論」阿毘陀論(醫方 等)、殊夜陀(祭祀等)、波羅陀(觀用法)、阿達 陀(禪定法)、西域記に「婆羅門學四 吠陀論(舊曰毗陀論也)、二曰醫、三曰工、四 曰術、二曰祠、謂三祭祈禱、三曰工、謂三 禮儀占卜兵法軍陣、四曰術、謂三異能伎數禁 咒醫方」。

四位の少將 「少將」を見よ。

しをらし 「しをらし」を見よ。

*しをらし 棋や柏を押分けて杖が枝

折の唄傳ひ(鶴九)

〔枝折〕道しるべ。西行の歌に「吉野山こぞの 枝折の道かへて、まだ見ぬ方の花をたづねん」と 見えるやうに、昔は山に入る者枝を折つ て道しるべとした、故に枝折と書いて案内の 意に云ふ。

*しんき このやうな順志の燃る時

に念佛申せば、咽にすくすく立つ

やうな(香庚申) 魂魄頭にこりかた

まつて順志がうせい六根を苦し

む(天智天皇)

〔順志〕人を恨み強んで忿怒すること、三毒 (貪欲・瞋恚・愚痴)の一である。遺教經に「瞋 心甚於猛火、常當防護無令得入、劫功

徳・無過・順志」。「順志がうせい」は順志

心印は摩訶迦葉 しんきんは摩訶迦

葉、辯舌はふるな尊、品行は須菩

提(大原問答)

「心印」は佛心印をいふ。摩訶迦葉(梵名、

Mahakasyapa)は釋尊の十大弟子中の

隨一である。釋尊が梵天に降ける蓮華を受け

て之を拈るを見て衆の意を知らず、獨り摩

訶迦葉その本旨を了悟し微笑して之に應じ

た。この時釋尊佛法の奥旨を迦葉に授けた。釋

尊迦葉はかくして佛心印を釋尊から最初に

授けた人なれば、「心印は摩訶迦葉」と云う

たのである。

*しんきん 白銀の心葉に黄金の盃

瑠璃の壺出す(源義經)

〔心葉〕竹本院後集正本(八行本)に、心葉に

「しんきん」と傍訓してある。「しんきん」

と讀むべきである。釋尊または佛物などの上

に、金銀・絲など花松枝などを作つて

添へる物の稱。源氏物語・繪合の巻に、「しん

ぎの箱のころばに」日本書紀(第一)に、

「小車の錦の着長銀の心葉角髪に取つて附

け」とあるは、この心葉を挿頭にしたので

ある。

*しんき 麓に立てる女郎花、しんき

しんきとなまめきて(淀鴨) しんき

燃して待つ宵に、似たりや似たり

けいせん花(生玉) 下地のよい顔が

なほ美しうならしやんして、女子

でさへ辛氣がわく(嵯峨三)

〔辛氣〕辛氣くさうとしんき。心のくさくさ

して浮立たぬこと。「しんき燃す」「辛氣がわ

く」の燃す「沸く」は「業を煮す」の煮す「な

ど」と同語であつて、氣を揉み懷悩するをい

ふ。「麓に立てる女郎花云々」とあるは、その

條をも見よ。

しんきやう ただしんきやうの禮を

重んじ、すこすこ歸る義經が心の

内を察し給へ(吉野忠信)

〔親兄親兄の義は孝弟の道である。謡曲・船

辨慶に「我兄親兄の禮を重んじ給ひ、一先都

を問ひきまつて。

*しんきん 宸襟を安んじ國家の太

平を致すべし(用明天皇)

〔宸襟〕天皇の大御心。宸は帝居の義。増廣に

「帝天帝居北辰之宮、故號曰北辰」と見

えてある。この義よりして宸臺、宸翰、宸閣

宸筆、宸庫など天皇についで云ふ。

*しんきん 小春が命は新銀七百五

十匁吞まされば此世に留むる事な

らす(天網島)

〔新銀〕享保銀貨を云ふ。貨幣の部を見よ。

しんき 皆様半七の朋輩衆が、しん

くな仕事でござりんす(安腹切)

〔しんき(辛氣)の轉訛〕しんきな仕事とは、

緻密で面倒な仕事の意。「しんき」を見よ。

しんきぐわちりんのひん 心月輪の

秘印を結び佛眼眞言を

唱へ給ふ(嵯峨天皇)

〔心月輪の秘印〕我が心を圓明

の月輪と觀じ、本有の法界法

門身の功徳を觀照する秘印で

ある。「印」を結合をも見よ。

*しんき 茶ばかりです

むものか、しん粉のや

うな物なりと茶の子唄

の子(安腹切)

〔粉〕粉の粉に水を加えて捏

ね、これを蒸して餅としたもの。粉糰。



〔相印輪月心〕

しんぎ 生駒新五左が瘡も(難陀三)

〔新五左〕武士をいふ俗語。難陀笑聲に「新五

左は今も武衣をいふ、又ふさきとあるふ。

傳言集覽に「田舎士をいふ」。

臣五人 「古」の聖代に臣五人云云を見よ。

しんごよみ 昔曆新曆當年未の初

春(大原問答)

〔新曆保井曆の作つた貞享曆を云つたので

ある。昔・曆の條を見よ。

*しんごん 十一から教へた經文も

眞言も魔道へ棄てたか物體ない

(萬年草) 何が日頃法印様、眞言陀

羅尼讀んだ眼で(萬年草) 眞言止觀

の妙行・華嚴禪門の宗旨に及ばん

や(大原問答)

〔眞言〕大日如來の説かれた如義眞實の語を云

ふ。眞言陀羅尼の陀羅尼は梵語(Dharani)

である。如來眞實の語に名付、即ち眞言で

ある、これ諸佛不可思議の密語なるが故に咒

とも云ふ。〔眞言止觀〕は、眞言密教と天台

密教とを併稱したものである。

*しんさう 山崎次兵衛様と申し

て、新艘の初床より面白いと悲し

いと譯のありたけ仕盡して(金門松)

〔新艘〕新造とも書く。禿から客をとる遊女と

なつた當時の名である。これになつた時は盛

んな内祝をなせ、道中姿も著飾つて將來の全

盛を見せうとしたものである。並木舎五瓶

編・諸語通言人倫部に「新艘と書くは新し

き舟に祝ひし故なり。都て新艘出に掛屋に

て婚禮の式あり。

じんぎさもん やつしは甚左衛門・

幸左衛門が思案ごとと安穩

〔甚左衛門〕大和山甚左衛門を云ひ、やつし流

れ事に長じてゐた名俳優である。役者金化粧
(享保四年刊)京都の巻、立役之部の巻頭に、
位階上吉として其藝評を載せてある。
申申如

「子の無居せるとき云云」を見よ。
じんずる 起請誓紙も若輩らし、血
酒のじんずるを飲むまいか(唐船歌)

「神水神に供へた水。太平記と巻二十五、住
吉合戦の條に「一足も引かず討死すべしと、
神水を飲みてぞ打立ちける」

*しんぞ 色に「がれて死なうなら、
しんぞこの身はなりしだい(曾根崎)
しんぞいとさかばゆさば、命も
磯の海を越え(津月三郎) しんぞ一
夜はお手枕(生玉) 前髪委に、しん
ぞ爪先よりぎりぎりまで打込み、
毎日毎日しづ心なき玉章(霄庚申)
空誓文の鶯はしんぞくされの中戸
に囀り(扇八景)

「神ぞ」神を照覧あるの略されたもので、即
ち偽を申すに於ては、神の照覧しますによ
つて直に神罰を蒙る法もあれとの意で、自誓
の詞である。「神ぞ腐れ」の「腐れ」は「誓文く
され」などといふくされと同じ語で、即ち偽申
すに於ては神罰によつてこの身くさる法もあ
るの意で、自誓の詞である。要するに偽らぬ
といふ意にかう云ふ言ひ方をしたのである。

*しんたいはつ 瀧口が身代の敵は義次
なりとささやけば(惣)
「身代」身上。身の上。

しんたいはつ 實録返せと身體は
つづに力を入れ(振袖始)

「身體髪膚」全身。孝經に、「身體髮膚受之
父母」。

*じんてう 晨朝の響は生滅滅多に

入用知れず(博多) 後に響く大長寺
の鐘の聲、南無三寶長き夜も夫婦
が命短夜と、早明け渡る晨朝に最
期は今ぞと引寄せて(天網島)

「晨朝」晝夜六時の一。卯の刻午前六時頃)を
いふ。「晨朝の響は生滅滅多」は、晨朝の響は
生滅滅多をもちつたのである。「ぼんなん」の
條を見よ。「早明け渡る晨朝」は、寺院で晨朝
の勤行に撞く鐘の響を云うたのである。

しんどう 腰掛け
て(安腹切) ああしんどうやと腰打
掛け(夕霧)

*しんどう 山猪の眉間の骨を射碎
きしん、淺利の與市が神頭の弓
勢(會稽山)

「神頭」などと書けども、實頭(變じた語であ
る。中を影みかすして中實なることを云ふ)神
頭の弓勢」は、神頭の矢の勢を云ふ。

しんどう 珠數さらさらと押揉ん
で、眞讀の普門品・千手の陀羅尼を
くりかけくりかけ祈らるる(天神記)

「眞讀」經卷の全部を讀誦するを眞讀と云ひ、
經卷の始の數行を讀誦して後はただ轉經する
を轉讀と云ふ。

しんといひのひかり
「洞空」しき谷の聲云云を見よ。
晋の七賢 晋の七賢が楽しみ重れて
爰に酌めやくめ(推符)

竹林の七賢と號し、西晉時代の山濤、嵇康、阮
籍、阮咸、劉伶、向秀、王戎の七人をいふ。皆
老莊虛無の學を崇尚し、禮法を輕蔑し、縱酒

昏酣世事を遺落した放達な者どもである。
*眞の臺子 御馳走の爲眞の臺子の
茶の湯なるべしとの事(鑑權三)

昔宋朝から博多の聖福寺に趣り、それより紫
野の大徳寺に傳はつた黒塗の茶棚をいひ、そ
の茶道の法式を傳へたもので、その傳授を得
て宗匠となる。されば眞の臺子には最も重要
な式法があつて、利休が南坊宗啓に傳へた眞
の臺子は五十箇條もある。鑑權三重帷子の
この後の文に「祝言、元服、出陣の臺子、こ
れ御簾の中の茶の湯の圖、誠の眞の臺子とは
此の行幸の臺子の圖」とあるは、夫れ夫れ茶
の湯の式法をいふうたものであるが、その
中には「行幸の臺子」などいふがはいりもので
あつて、果林寺も茶道には未熟であつたので
はあるまいか。「だいたす」を見よ。

しんはうしよ
「天定まつて人に勝つ云云」を見よ。

しんばし 子供が爲には親の追善、
我夫の串の矢さきを見せんと、し
んばしかためて切つて放せば(源義
經) 父が射られし矢壺を外さじも
のと、しんばし固めひやうと切つ
て放つ(扇八景)

「しんばし」(雙)に撥置んの増加したもので、
「いま」(今)をいふ。「みな」(皆)を「みん
な」し云ふの類である。

*しんはちまん しん八幡侍冥利他
言せまじ、心底残さず打明け
や(天網島)

「神八幡」神八幡も照覧あるの略されたもので、
で、自誓の詞である。浮世花鳥風月(正徳三
年刊)鳥之部、鳥の聲も常にかはり物の條に、
「今日の網入來神(神祇者)祝者、自今は別して
お心安くなど、物堅く挨拶せられ」。

しんふが 韓非申不害が劍術を傳

へ(唐船歌)
「申不害支那周時代の人で、刑名の學を修め
韓の昭侯の相となつた。國治り兵強く、申不
害の世を終へるまで韓を侵す國がなく、申不
害しくは史記・申不害列傳を見よ。申不害は
劍道家ではない。「ふんどう」を見よ。

しんべん やりての鍋が薬罐聲、煮え
かへつたの顏付して、此方のし
んべはこらへて見えぬ、此方と
(酒吞童子) この春抱へた廣文が口
入のしんべめも、明暮味え廻れど
も(酒吞童子)

新部子の略。禿をいふ。嬉遊笑覽卷九下に
「歌舞妓事始に、新部子といふは幼少にて藝の
至らざるをいふとあり」と見えである。歌舞
伎子に限らず、禿をもいうたものである。美
景時繪の松(寶永五年刊)卷二に「私も一寸見
ましたが、まだ十五六の新部子、且那の御相
手には不足ながら御供申しませう」

*しんべう 足の先にて押銀め抑へ
鎖めしんべうさ(曾根崎) 騷騷
しい、しんべうにもなること
を天網島)

「しんべう」(神妙)の音便。殊勝。手際(よい
こと。おとなしいこと。但言集覽に「俗語に
神妙と云はおとなしい事をいふ」。

しんほうしよ 「しんはうしよ」を見よ。

*しんぼち 本の和田の新發意を見
るやうな(大經師)

「新發意」發心して佛道に入つて日まだ淺き者
の稱。「本の」の新發意を見よ。

*じんみらいさい 盡未來際畜生界
を出でやらず(天啓) 假令死んでも

身體も戻さぬ、じんみらいまで女
夫(晋庚申)

〔盡未來際〕未來のある限。未來永遠。地獄本
顯經に「盡未來際云云」。

しんらはんさう 善惡邪正森羅萬
象、來れば映り去れば去り(大經)

〔森羅萬象〕天にある總ての物を萬象といひ、
地にある總ての物を森羅と云ふ。法句經に、
「森羅及萬象、一法之所印」。

*じんりん 人倫絶えし深山の
奥(浦島)

〔人倫人類〕「倫は類の義」。

しんろ ざぞ小辨もしんろかる、己
もくわを抜かした(生玉)

「しんどう」「しんど」とも云ふ。「しんどう」を
見よ。越谷秀真編・物類稱呼・五に「クダビレ
といふことを鑑内にてシンドと云。シンドロの
轉語にや、シンドロは辛勞なり」。

す

すいえんしんによ

「すいえんしん」に見よ。

すいけん 唐物町の唐犬扶持、傾城

町のすいけん扶持、色里の尨犬扶
持(千疋犬)

小野職博撰・本草紀聞に「多毛曰・龍と、是は
すいけんなり、毛長く獅子の如し、蠻國の産
なり、狎の類類なり」。

すいこ 「すいこ」を見よ。

すうぜう 「すうぜう」を見よ。

すうわり 手樽も足もいそいそと、

草履も横にすうわりの、腰をよぢ
らし出でて行く(三國志)

「ほつそりすうわり」柳屋とさへ言ふぢやあね
えか。美談詩論の松(寶永五年刊)巻五に、
「喝はおつまを連れて出づれば、傍へはかま
が長つて、飛車角の並んだやうにおつまをか
こひ、押へには横へすうわりとした體女、酒
のしやく取る小美女まで居合腰に横へ」。

*すがく 二十五筋の琴の絲、結び
契りし年の數、いざすががきて箱
崎の、まつとし聞かば我も急が
(國性)

〔清遜〕歌なしに零或は三昧條をかきならす
と。狩谷響之撰・毎條千金に「スガは清字の心
なるべし、音のさやかなるを云ふなるべし」。

すかたん この軍介を東へ遣りほつ
かりすかたんさせんな、兎角汝
が詞とばもんちに出る合點(偶田川)

「すか」は透即ち空虛「たん」は露の意であら
う。墨をあけること。但言集覽に「すかたん
雜義。(俳諧新季寄)元日紫野大徳寺にて空露
にて難夷にすむるとなり。」「すかたん」は「す
こたん」ともいふ。續遊笑覽卷九下、言語の
條に、すこたんとは思ふに選されたるを云ふ
なりと見えてゐる。

*すがり この吉岡がすがりの花な
ればこそ、ぬし達に身をぶんまか
する(吉岡集)

末枯の義。盛りの過ぎた終りなことをいふ。
和訓栞に「すがる。物の末になりて盡きん
とすをすがるといふ。末枯の義なるべし、
縱字をよめるも此義あり」。

すがる 牡鹿の苑の法の導、これなれ
や、互にそれと道芝のすがるばか

りの懸草も、めは繁り添ふ母子草
千草八千草(用明天皇(二枚繪)

結合ふばかりの懸心といふに「すがる(鹿)を
きかせたのである。鹿は殊に女夫睦いもの
なればよく云うたのである。(すがるは、古
今集・離明歌の中に、「すがる鳴く秋の萩原朝
たちて、旅行く人をいつこと待たむ」とあり
て、似我婦土婦のことである。さるを古今
集の舊説や顯注密勘などには、「すがる」を鹿
のこととしてゐる。果林子が顯注密勘に據つ
た例は他にもあるもので、これも「すがる」を鹿
とする説によつたものである。(この文に
「牡鹿の苑の法の導」とあるは、その條を見
よ。書言字考用集氣形門に「鹿。鹿子」

*すぎちゆう やりての杉重に樟の
名酒をもり口や(提燈)

〔杉重〕杉のへき板で造つた重箱、この文は
遣手の名の杉に杉重をいひかけたのである。

すぎなりさや 黒羅紗の杉形鞘に羽
織着て、お駕籠昇くのけこればか
り(陸奥歌)

〔杉形鞘〕岩代國若松(會
津のこと)城主松平肥後守正信の鑑標。
倉(薩摩歌)

杉形の中締 杉形の中締は豊前の小
倉(薩摩歌)

城主小倉原右將忠雄の鑑標。
〔杉形の中締〕

すぎはひ 貧になる尾の裏借屋、は
やすきはひに唐人の行列賣と罷成
る(大經)

世を過ぐるなりはひの義。渡世に譬わさ
生業。『萬葉集』上巻の鐘云云を見よ。

すぎはら 小指の血しは杉原に、お
して心をみかきもり(生玉)

〔杉原〕奉書に似た紙である。雍州府志(貞享

三年刊)土産門下服器部に「凡加賀奉書越前
烏子、以是爲紙之最、杉原紙之所出也、始
謂之杉原紙、今省紙字直稱杉原」。

*すきや 裏のすきやに寝てゐられ
ます(大經)

〔歌書屋〕茶室の稱で、離座敷であつて四疊
半、四疊、三疊、二疊等の數種ある。歌書屋
の片隅に爐を切り、一隅には床があつて、掛
物或は花入を具し、また窓があつて明を取つ
てゐる。

杉山平八 杉山平八を四つ橋とはは
どうぢや、江戸からも京からも四
方へ引つり引張つた今宮

寶永頃の大坂の歌舞伎役者であつて、その藝
上手の方であつた。役者謀火燭(寶永七年刊
大阪の巻)に、藝評を「上止」としてゐる。こ
この文は、杉山平八は人氣がよかつたので、江
戸からも京都からも引張風であつたの意。

すぎをり 花の時節は杉折の、雲
脚蝶形 洲崎形(酒吞童子) 持たせ
し遣手の杉折や、禿が袖の捉重
(扇八景)

〔杉折〕杉材で造つた折で、菓子などを盛る
もの。

*すぐぜ 此處にて逢ひ奉るも宿世
の御縁(蟬山遊)

〔しゆくぜ〕宿世の約である。過去世・宿縁。
すぐち 呂太后から釣を取る女御の
身持、御親父の目にかからぬはす
ぐちが闇か(浦島)

いづち。兎唇。但言集覽に「すぐち。俗吻字
をすぐちと訓めり。(好色一代女人手代鉦た
たき箱足吻に限らず逢ふを適く思へば)。
ずくにふ 萬九捕つて突退け、こり
やすくにふ。知れぬ間は隠すが祕